豊後大野市内遺跡
発掘調査概要報告書６

ー平成26年度調査ー

２０１６

豊後大野市教育委員会

例　言

1、本書は平成26年度に豊後大野市教育委員会が国庫及び県費の補助を受けて実施した市内遺跡事業の確認調査概要報告書である。

2、調査の体制は以下のとおりである。

調査指導　田中裕介(別府大学教授)
　　横澤　慈(大分県教育庁文化課)
調査主体　久保田正治(豊後大野市教育委員会教育長)
調査担当　赤嶺且治　(生涯学習課長)
　　高野弘之(生涯学習課文化財係長)諸岡郁 豊田徹士　大野幸則(同　文化財係)

このほか、下村智氏(別府大学教授)、杉井健氏(熊本大学准教授)、小林昭彦氏　松本康弘氏(大分県埋蔵文化財センター)のご視察ご指導をいただいた。

3、漆生古墳群の調査における遺構実測およびトレース、秋葉鬼塚古墳及び坊ノ原古墳の墳丘測量図作成については別府大学考古学研究室生の協力をいただいた。また、発掘調査は別府大学の「埋蔵文化財実習Ⅱ(遺跡発掘)」の授業として行った。写真撮影は調査員で行った。

4、秋葉鬼塚古墳の遺物実測およびトレースは雅企画有限会社に委託したほか、田中裕介氏・別府大学考古学研究室生の協力を得た。

5、坊ノ原古墳の基準点設置および、中ノ原古墳及び向原古墳の墳丘測量図作成については(株)システムサポートに委託した。

6、本書の執筆はⅡ漆生古墳群の発掘調査について田中裕介氏・井大樹氏、安部和城氏、江口寛基氏、中嶋小春氏(別府大学考古学研究室)、坊ノ原古墳については玉川剛司氏(別府大学文化財研究所)井大樹氏(別府大学大学院生)、秋葉鬼塚古墳出土遺物については田中裕介氏より玉稿をいただいた。その他の執筆は調査担当が行い、編集は諸岡が行った。

目　次

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　漆生古墳群……3
　1調査の経過……3
　2漆生古墳群第３次・第４次調査……5
　3大分県下の刳抜式石棺……14
Ⅲ　秋葉鬼塚古墳（２次調査)……20
　1調査に至る経緯……20
　2確認調査の概要……22
　3秋葉鬼塚古墳出土埴輪ほか……30
Ⅳ　坊ノ原古墳……34
　1坊ノ原古墳墳丘測量調査について‥34
　2坊ノ原古墳の石棺材……43
Ⅴ　中ノ原古墳……45
Ⅵ　向原古墳……46

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過

大分県豊後大野市は、平成17年3月に大野郡7町村が合併して成立した。その市域は広大で、大分県南部の大野川中流域のほぼ大部分に相当する。結果、豊後大野市内には先史から近代に至る様々な歴史・文化遺産を有することとなり、それは約500件の指定文化財や約700箇所の周知遺跡数にも表れている。これらの保護について合併前の各町村時代から引継いで取り組まれているが、特に市域の広域化と同時に各種開発工事も増加し、比例して埋蔵文化財調査の対応件数も増加傾向にある。

豊後大野市教育委員会は国庫・県費の補助を得て、各種開発工事に対する遺跡の保存に向けた協議資料作成のための発掘調査と並行して、古墳などの主要遺跡の範囲確認調査を実施している。平成26年度は開発工事に伴う調査は発掘にまでは至らなかったが、遺跡範囲の確認調査として漆生古墳群と秋葉鬼塚古墳の2箇所、墳丘測量調査を坊ノ原古墳・中ノ原古墳・向原古墳の3箇所で実施した。

漆生古墳群は、平成23年度より別府大学の協力を得て、古墳群4基の墳丘測量図の作成、及び遺構確認調査を行ってきたが、平成26年度も継続して第3・4次調査として1号墳後円部と前方部の墳端の確認や2号墳の墳頂部、城山古墳の墳頂部など未確認箇所の調査を実施した。

秋葉鬼塚古墳は平成25年度に続いて範囲確認の調査を行い、葺石や周溝など墳端・周溝などの遺構や埴輪を確認することができた。

坊ノ原古墳については当初は確認調査も予定していたが、期間の関係上平成26年度は測量のみで、次年度に確認調査を実施している。

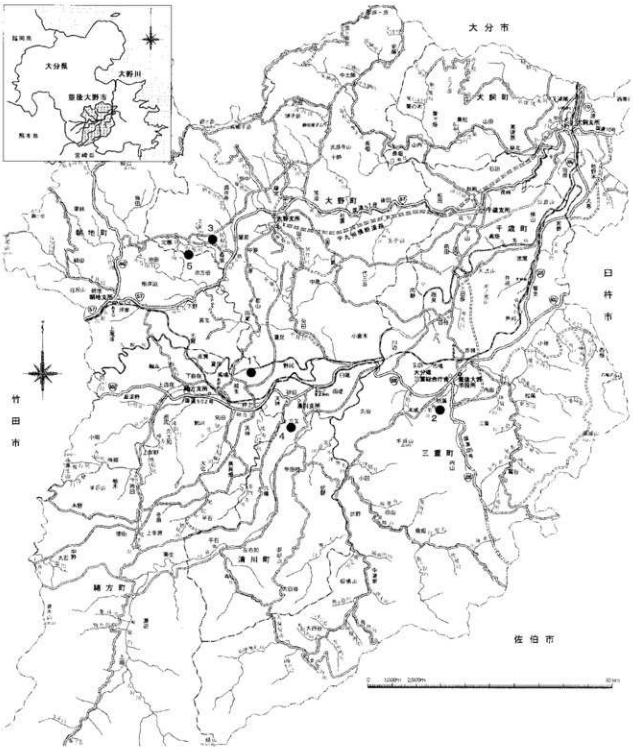
2　歴史的環境

大野川中流域には阿蘇溶結凝灰岩による台地や、大野川本流及び支流による沖積平野などの地形が随所に見られ、これらの地形上に数多くの遺跡が所在している。

旧石器時代の遺跡は国指定史跡の岩戸遺跡をはじめ、市ノ久保遺跡・津留遺跡・百枝遺跡・駒方遺跡群など著名な遺跡が多く知られている。縄文時代も同様で、早期の田村遺跡・鳥穴遺跡、前期の千人塚遺跡、後期の夏足原遺跡・惣田遺跡、晩期の大石遺跡・宮地前遺跡などで良好な遺構や遺物などが確認されている。

弥生時代では特に後期に大規模集落として多くの遺跡が各台地上でみられる。200基を超える竪穴住居跡や掘立柱建物群が検出された鹿道原遺跡をはじめ、高松遺跡・高添遺跡・二本木遺跡・陣箱遺跡など多数知られている。県下でも代表的な遺跡集中地域であるが、古墳時代以後になると集落遺跡は減少し、生活の痕跡は台地上から谷底平野への変化がみられる。しかし墳墓の遺跡は多く、市内には8基の前方後円墳をはじめ、各河川流域の単位で古墳群が築造されている。特に前方後円墳6基が集中する三重川流域周辺を中心に、平井川流域周辺に円墳群、緒方川流域等に横穴墓群など数多くの古墳・横穴墓の分布が知られている。

歴史時代以後について、市域は豊後国大野郡の大部分に含まれる。条里跡と推定される地割が緒方平野で確認され、磨崖仏や石塔類などの石造物が多く所在する。遺跡調査例としては古代の遺跡は古市遺跡等で行われているのみであったが、近年加原遺跡で古代の建物群跡などが確認され、郡衙関連の施設跡と推定される。中世になると建物遺構が惣田遺跡や高添遺跡で、墳墓群が千人塚遺跡で検出されている。また、松尾城や高尾城など山城をはじめ、上門出遺跡や一万田氏館跡など多くの中世城館跡が確認されている。近世は臼杵藩と岡藩の領域に属し、両藩の様々な関連施設や、街道や河川港などの交通の遺跡等が所在し、一部は現在でも人々の生活や社会と結びついている。



第1図　平成26年度 市内遺跡調査位置図

No.	遺跡名	調査地	調査期間	調査内容
1	漆生古墳群	緒方町越生字大久保・城山	2014.8.7～2014.12.27	範囲確認調査
2	秋葉鬼塚古墳	三重町秋葉字鬼塚ほか	2014.10.22～2014.12.19	範囲確認調査
3	坊ノ原古墳	大野町桑原字羽部	2014.9.3～2015.3.28	墳丘測量調査
4	中ノ原古墳	清川町三宝字辻	2015.3.9～2015.3.25	墳丘測量調査
5	向原古墳	大野町北園字竹ノ内	2015.3.9～2015.3.25	墳丘測量調査

Ⅱ　漆生古墳群

1　調査の経過

緒方町越生区の大野川沿岸を見下ろす丘陵上に所在し、前方後円墳1基を含む4基の古墳群が尾根地形上に並ぶように分布している。石棺が露出する一部の古墳は古くから存在は知られていたが(1)、平成4年に前方後円墳の発見により現地踏査が行われ、古墳群として確認された。名称としては、字大久保に3基所在することから、新発見の前方後円墳を大久保1号墳、石棺が露出している旧「大久保古墳」を大久保2号墳、1号墳の南に古墳と推定される地形上の高まりを大久保3号墳とし、字城山の城山古墳を含めて漆生古墳群と呼称されている。大久保1号墳の墳丘測量や大久保2号墳の石棺実測が行われたものの、築造時期の推定できる出土遺物等は全く知られてなかったため、大久保2号墳及び城山古墳は石棺の観察から中期古墳、大久保1号墳は墳形による推定で前期古墳とみられていた。(2)

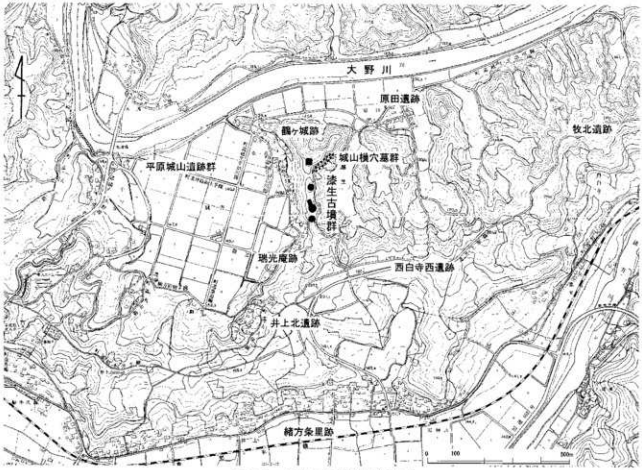
遺跡範囲の確認調査として平成23年度より測量調査を開始し、平成24年度に第1次調査(3)、25年度に第2次調査として各古墳の墳端等にトレンチによる試掘調査を実施している(4)。大久保1号墳からは葺石や段築など構造が、大久保2号墳からは石棺蓋を検出して主体部の存在を確認するなどの成果があったが、出土遺物が乏しく時期は不明のままである。平成26年度にも第3次・第4次調査として、大久保1号墳前方部及び後円部の東側、大久保2号墳・城山古墳の墳頂部分の調査を行い、平成27年度に第5次調査を行っている。

註　(1) 日名子太郎「大野郡古墳横穴調査書」『大分縣史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』 昭和4年

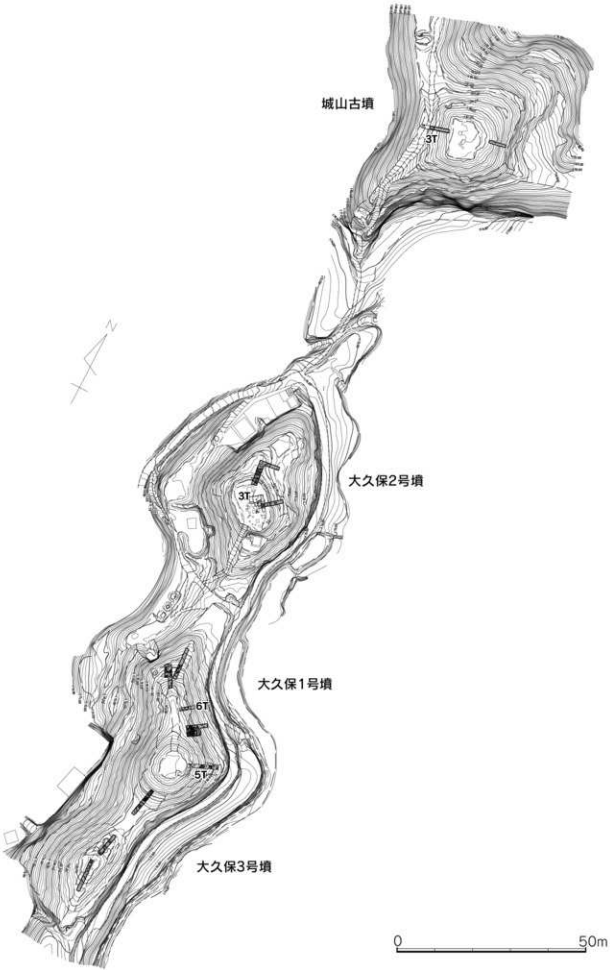
(2) 田中裕介ほか「緒方町越生にある漆生古墳群の観察」『おおいた考古 第6集』大分県考古学会 1993 年

(3)『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書4』豊後大野市教育委員会 2014 年

(4)『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』豊後大野市教育委員会 2015 年



第2図　漆生古墳群周辺地形図



第 3 図 漆生古墳群全体測量図（1：1000）（玉川作成）

2　漆生古墳群第3次・第4次調査

井大樹・安部和城・江口寛基・中嶋小春・田中裕介

1)はじめに

既往の調査から　漆生古墳群の発掘調査は、2012年度と2013年度の冬に続いて、2014年度には8月と12月にそれぞれ豊後大野市教育委員会と別府大学考古学研究室の合同調査団によって第3次調査と第4次調査を行った。第1次調査では、測量調査によって城山古墳が方墳である可能性が指摘された。大久保1号墳では第2トレンチからくびれ部が検出され、前方後円墳であることが実証された。後円部には尾根線を断ち切る溝と葺石、くわえて1段目の平坦面も確認された。さらに1次調査でははっきりしなかった前方部前端の位置が、2次調査によって判明し、墳長は36mとほぼ確定した。大久保2号墳では、第2次調査で葺石や周溝や突出部は確認できなかったため、前方後円墳の可能性はなくなり、墳丘測量図から、方墳である可能性が指摘された。大久保3号墳では箱形石棺の蓋石が発見され、周囲にはベンガラの塗布が行われていた(1)。一度蓋石をあけた追葬の痕跡も見つかり、墳端の削平面をみとめて径10mほどの円墳であることが判明した(2)。

第1次と第2次調査の結果、古墳群は4基からなり、前方後円墳、方墳、円墳と変化に富み、葺石のある古墳、ない古墳の違いがあることもわかってきた。しかしトレンチからは出土遺物がほとんどなく、土師器の破片がわずかに出土しているのみである。したがって各古墳の築造順序や時期などは依然として明確ではない。今回は大久保1号墳の墳形と段築などの墳丘構造と時期推定の資料を得ることと、2号墳の主体部確定を第一の目的に発掘調査をおこなった(第3図)。

第3次発掘調査

現地調査は諸岡郁(豊後大野市教委)、上野淳也(別府大学文学部准教授)、田中裕介(別府大学文学部教授)を主担当者に、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力をえて、2014(平成26)年8月 3 日(日)、7日(木)から 12 日(火)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)および考古学研究室の学生が参加し 9 月4日(木)に補足調査を行い終了した。参加者は以下の通り。

作業員　高山幸治、高山 尉、佐藤政治

学生　崎野祐太郎、白濱聖子、園田涼太、千原和己、宮木貴史、山下祐雨(以上院1年)、井大樹、中嶋小春、藤井幹也、藤川貴久 (以上学部4年)、安部龍之介、鮎川和樹、小中原南、鮫島葵、塚本史晃、中原彰久、成合修造、松尾知哉(以上学部3年)、井手基子 (以上学部1年)

第4次発掘調査

現地調査は諸岡、田中を主担当者に、上野、玉川が副担当であたり、2014(平成26)年12 月 13 日(土)に調査区の設定、12 月 20 日(土)～22 日(月)、25 日(金)～27 日(日)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)および考古学研究室の学生が参加した。参加者は以下の通り。

学生　崎野祐太郎、白濱聖子、千原和己、宮木貴史、山下祐雨(以上院1年)、上田文華、真謝大地(以上学部4年)、鮎川和樹、岩永悠輝、大矢健太郎、河内花織、後藤春香、小中原南、鮫島葵、田中光子、田上悟大、塚本史晃、中原彰久、浜口蛍、松尾光、松尾知哉、松下由香里、村田仁志(以上学部3 年)、高木慎太郎 (以上学部2年) 井手基子、後藤愛美、時枝杏名、野田千輝、吉岡拓哉(以上学部1年)

また発掘中には、下村智(別府大学文学部教授)の助言を現地で得たほか、赤色顔料の同定を平尾良光(別府大学文学部教授)に行っていただいた。また図面整理とデジタルトレースには井・安部・江口・中嶋(院1年)が当たり、玉川剛司(別府大学学文化財研究所)の協力を得た。なお本稿は以上 4 名と田中が協議して成稿したものである。

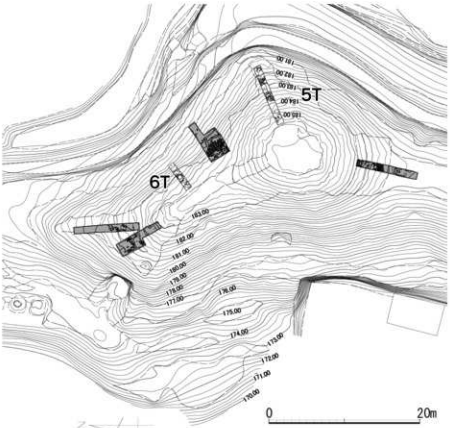
基本層序　古墳群の造られた丘陵は阿蘇4溶結凝灰岩の堆積浸食により形成された丘陵である。基盤層はこの凝灰岩層がかなり風化して軟化した土質である。現表土の腐植土層を第1層、その下の自然堆積層を第2層、盛土等の人為堆積層を第3層、基盤の凝灰岩層を第4層として、その層序の間に形成される人為的な面をアルファベットで記載した。

2) 第3次調査

①大久保1号墳

（第4図　写真図版1）

昨年までの尾根線上の後円部墳端と前方部前端の葺石基底ラインが確定し、墳長は約36mと確定した。さらに1次調査において確認した東側くびれ部の位置から平面形が確定すると共に、後円部には段築が存在することが判明していた。そこで3次調査では、後円部の平面形と段築の位置と高さを復元するためと、東側の墳端と段築部分の高さのデータを得るために墳端から後円部墳頂にいたる第5トレンチと、前方部平面形を復元するためその東側斜面に第6トレンチを設定した。（以上田中）



第4図　大久保1号墳のトレンチ配置（1:500）

第5トレンチ（第5図　写真図版1）

後円部墳端の確認、及び墳丘の段築、葺石構設状況を確認し、時期比定の可能な遺物を採取するため、主軸に直行する形で北東方向に長さ約 8.0 m、幅約 1.0 mのトレンチを設定した。

1層の表土を剥ぐと、2a、2b 層が検出された。2a、2b 層を取り除くと、2c、2d 層が検出された。これらはすべて暗褐色軟質土であり、土の色調と質は微妙に違うが、すべて墳丘盛土の上部からの流出土であると考えられた。

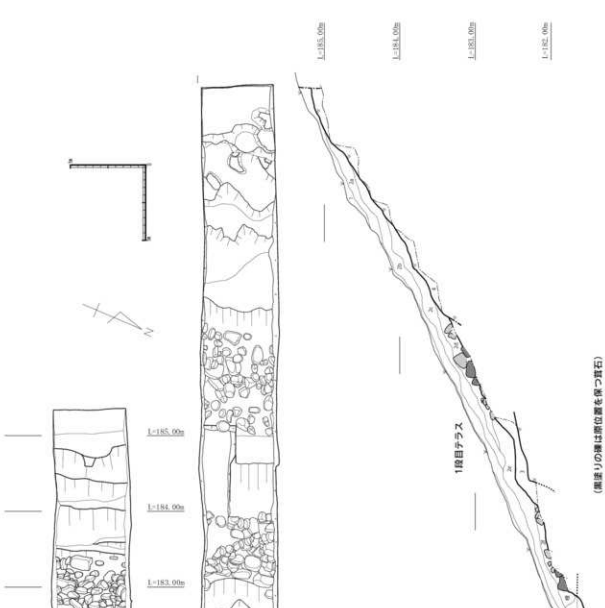
流土2層下から、2ヵ所の葺石面を検出した。また、葺石面の間からテラス面を検出した。下部の葺石斜面を1段目斜面葺石、上部の葺石斜面を2段目斜面葺石とする。

1段目斜面上位層の2d 層を取り除くと、テラス面が検出された。さらに下位の 2e 層からは葺石が検出されている。このテラス面の確認を行うためにサブトレンチを設定し、テラス面(3 層)を掘り下げると、基盤層の立ち上がりが検出された。そこからテラス面は、盛土で形成されており、下位で検出した葺石部は、3層上面の盛土上に葺石を施工したと考えられる。

2段目斜面上位層は、墳頂部からの流出土である、2a、2b、2c 層を取り除くと 4 層の凝灰岩礫を含む基盤層がすぐに検出され、既に葺石のほとんどは流出していた。そして、その下位の 2f 層を取り除くと、そこで葺石を検出した。葺石検出面で留めたため、未掘であるが、サブトレンチの観察から、盛土 3 層が葺石の下に延びるため、葺石の直下は盛土が存在すると考えられる。

1段目斜面から2段目斜面の途中部分までと、テラス面下位の葺石施工面下には、3 層の盛土が続くと思われるが、今回の調査では葺石検出面で終了し、下部は未掘である。

最後に、トレンチ墳端側の A 層であるが、これは古墳の造営とは関係が無く、後世に掘削された土壙であると思われる。この面で幅約 0.8mほどの板石を検出した。



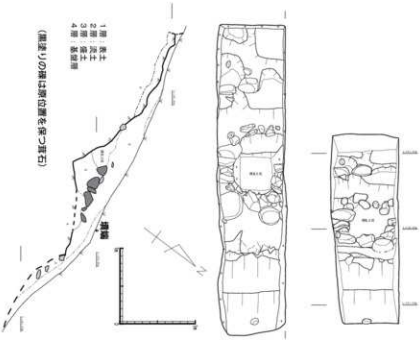
第5図　大久保1号墳　第5トレンチ(1/50)

以上、第5トレンチの成果をまとめると、大久保1号墳は、基本的に地山成形で墳形を作り、その地山土を用いて後円部の円形や、テラス面などの墳丘整形を行っているものと考えられる。また、今回の調査で検出したテラス面は、第1トレンチ(第1次調査)で検出したテラス面、くびれ部に設定した第2トレンチ(第2次調査)で検出したテラス面とほぼ同一レベルにあることから、これらのテラス面は連続し、後円部をめぐる第1段テラスを形成すると考えられる。また、墳端部分が別の遺構によって破壊されているため、墳端の厳密な確定ができなかった。また、遺物は土師器小片が2点、2層の最下部から出土したが、時期を比定することはできなかった。(安部)

第6トレンチ（第6図　写真図版1）

前方部側面の墳端及び墳丘構築状況、遺物の確認などを目的に、第6トレンチを前方部左側の斜面に設定した。

トレンチの掘り下げを進めると、表土 1 層と比較的厚い流土2層の下、トレンチ中央部から葺石が検出された。葺石面の中央部は木根による攪乱が見られた。その攪乱土壙を掘り下げると、地山の土を使って盛土がなされ、その上に葺石が敷かれているのが確認された。さらにその攪乱土坑を利用して地山まで掘り下げると、下にはL字形に基盤層を掘削した水平面が認められた。一方、トレンチの前方部墳頂側、即ち葺石面の上位では、表土直下で基盤層が露出していた。つまり前方部側面の造作は、基盤層を一旦 L 字形に削り出して、その上に盛土で斜面を造り、葺石を敷いていることになる。



第6図　大久保1号墳　第6トレンチ（1/50）

葺石の下端には、基底石と思われる大型の円礫が確認された。その前面は基盤層を削出しており、墳端部であった可能性が高い。

また、トレンチ上部を墳頂側へ1m拡張して掘り下げたところ、凝灰岩の基盤層と円礫が確認され、前方部斜面には段築が構成されていない可能性が推定される。葺石は人頭大の川原石を用いている。

遺物については、土師器の胴部小片がトレンチ下部の削平部から2点、攪乱土壙から1点出土した。これらは上層から流れ落ちたものではないかと思われる。これらは時期を明確に特定できる破片ではない。（中嶋）

調査成果　前年度の発掘調査成果に追加修正を加える形で、成果報告を行う。①前年度調査によって、すでに後円部墳端が確定している。これに加え、今回の調査で、第 4 トレンチの前方部前端より検出されたトレンチと直行して列をなす葺石を、第3トレンチにて検出されていた円礫散布の延長ということも合わせて前方部前端とするならば、古墳の全長は約 36mとなる。②前年度調査において、後円部にて検出された周溝が、前方部側では確認できなかった。③前年度調査ではほとんど遺物が出土せず、時期を特定できる遺物の出土が期待されていたが、今回も古墳築造に伴う資料は得られなかった。（田中）

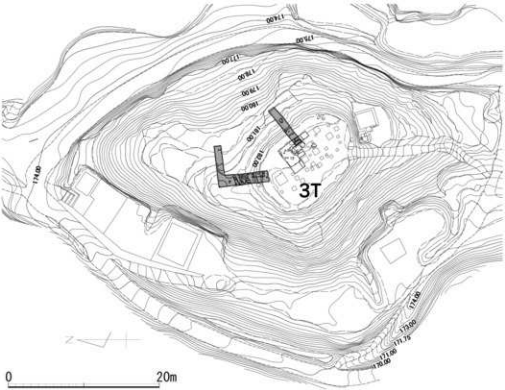
② 大久保 2 号墳（第7図　写真図版1下）

昨年までの調査では、墳丘の形状および構造の解明を目指したが、葺石がないことを確認した程度で、良好な資料は得られなかった。そこで今回は石棺蓋の露出した墳頂部にトレンチを入れて、棺身の発見と墓壙の確認を目指して第3トレンチを近世墓地の合間に設定した。（田中）

第3トレンチ（第8図　写真図版2）

大久保 2 号墳では、以前から凝灰岩製の刳貫石棺が露出しており、古墳としての認知は早かった。その一方、近世から墓地としても利用されており、墳頂部の改変は古墳群の中でも特に激しかった。そこで今回の調査では、石棺の身及びその埋葬施設の存在の有無を確認する為、調査区を設定した。はじめは比較的近世墓の集中が少ない石棺の北

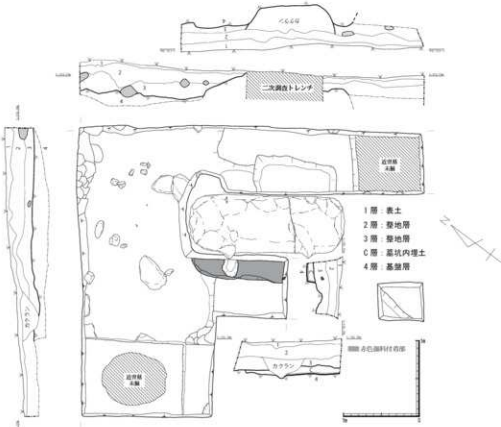
西側に約1m×約2m40cmの調査区を掘り下げたが、思ったより厚く凝灰岩礫を多く含む整地層2層が堆積し、遺構を検出することは出来なかった。整地層には人頭大の凝灰岩礫が多く含まれ、基盤層直上では中世糸切底の土師器小片が出土した。その為、この整地層とそれに伴う削平は、古墳時代ではなく中世に下ると考えられる。近接する城山古墳では、中世山城としての利用が確認されており、大久保2号墳でも中世の利用の可能性について検討する必要があろう。また、調査区の南西端では近世墓が検出されたため未掘とした。



第7図　大久保2号墳のトレンチ配置（1/500）

当初の調査区設定では主体部を確認することが出来なかった為、石棺の両側面に添うようにさらに調査区を拡張した。拡張区の北東側では、2次調査第1トレンチ掘り下げの際に確認された石棺付近については、規模や土層堆積の状況から本来の古墳に伴う墓坑でないことが明らかになった。また、調査区の東端でも近世墓が検出されたため未掘とした。

一方、石棺の西側拡張部では、整地層から赤色顔料の付いた親指大の凝灰岩片が数点出土していたので、慎重に掘り下げたところ、赤色顔料を多く含むC層が検出された。C層は約10cmほど堆積していたが、遺物等は確認されなかった。その下からは凝灰岩の基盤層を刳り貫いて整形された墓坑の残存部が確認された。その表面には赤色顔料が塗布され、小口は方形でなくやや円形の形態をなしている。また、墓坑の側壁は10cm程度残るのみでこの部分にも赤色顔料が塗布されていた。出土遺物に関しては、整地層より土師器片が数点出土しているが、いずれも小片である。



第8図　大久保2号墳　第3トレンチ(1/50)

調査成果　今回の調査の成果に関しては以下のことをあげることができる。

①赤色顔料を塗布した地山掘

り込みを確認できた。

②赤色顔料は科学分析の結果ベンガラであることが確認できた。

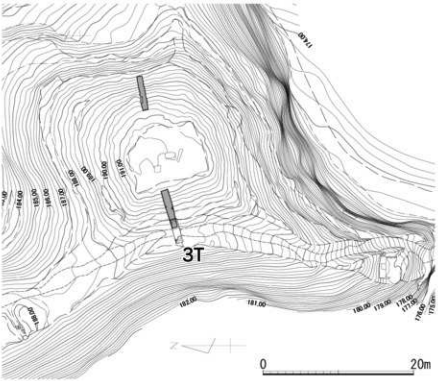
③石棺の身の破片を一点も確認できなかった。その為、埋葬施設に関しては一般的な刳貫石棺ではなく、身は基盤層を刳り貫いて用いている可能性が示唆された。

④中世から近世にかけて削平を相当受けている為、城山古墳同様、中世山城施設として機能していた可能性があることが示唆される。(井)

3) 第4次調査

①城山古墳(第9図)

城山古墳は、発見時には円墳と考えられていたが、1次調査に先立つ詳細な測量の結果、方墳の可能性もでてきた。しかし、今次の調査にて、主体部の位置がやや西側に片寄りがあること、さらに大きく削平を受けていることが確認され、墳形の再検討の必要性がでてきている。



第9図　城山古墳のトレンチ配置(1/500)

1次調査では、第1トレンチ(幅1m×長さ5.2m)と第2トレンチ(幅1m×長さ4.6m)を設けた。第1トレンチは、表土層を剥ぐとすぐに基盤層4層が確認できたが、トレンチ上部からは軟質の茶褐色土3層が認められた。この部分から上は盛土ではないかと推定できた。それより下は葺石もないことから、基盤層4層を直接削り出して墳丘を構築していると考えられる。第2トレンチも第1トレンチと同様に基盤層4層がすぐに露出することから、やはり墳丘は削り出しによって構築されたものと思われる。

第10図　城山古墳　第3トレンチ(1/50)

以上の調査所見と墳頂部に散乱する箱形石棺の石材の存在から、盛土上からの乱掘による埋葬施設の破壊が想定され、今次の調査ではその墳頂主体部の清掃と合せて、墳端の確認するために第3トレンチを設定した。

第3トレンチ　第1トレンチを拡張して第3トレンチを設定した(幅1m×長さ3.2m)。表土層(茶褐色、1cmくらいの小礫含むから10～20cmほど掘り下げたところで、トレンチの東側ではすでに基盤層4層が確認され、このことからトレンチの東側は斜面となり、明確な変換ラインを境にして、西側は平坦であることが確認された。トレンチ西端(長さ50～60cm)には落ち込みがあり、深さ約30cm程度のA層(暗褐色、5～10cmくらいの礫含むが堆積していた。A層を深さ20～30cm程度取除いていったところで基盤層4層が確認された。層序は、落ち込みの埋没の後、削平が行われて、斜面と平坦面の2つの区画と境が生じたものと考えられる。そして、その上に表土層が堆積したものと思われる。第3トレンチからは遺物は出土していない。

墳頂部調査区(写真図版2)　城山古墳には墳頂及びその周辺に、凝灰岩製の石棺材が露出していることが以前から知られていた。棺材の特徴から考えると、大久保2号墳とは異なり、組合せ式の箱形石棺の部材と考えられる。墳頂部のものは比較的保存状態が良く、組合せ式の箱形石棺の側板と判別できるものが1点、不明部材が2点残されている。いずれの棺材の一方に、赤色顔料が塗布されている。

そして主体部調査のため、墳頂部に第4トレンチとして、幅50cmの十字のベルトを残し、計4区画に分割した調査区を設け

た。中央部より、数10cm程度掘り下げたところから、組合せ式の箱形石棺の小口板の抜き取り痕らしい痕跡と、墓坑の底部の輪郭が確認された。さらに、墓坑の痕跡内からは、赤色顔料が塗布された凝灰岩の断片が確認され、その底部は小礫等の敷かれた状態ではなかったので、底板が施されないタイプの箱形石棺が中心主体に用いられたと推定される。また周囲からは、高坏の口縁部と脚部それぞれの土師器片が出土した。さらに、東側からもう一ヵ所、赤色顔料の塗布が確認された。この付近にも主体部が存在していた可能性があるが、石棺が使用されていたかどうかは不明である。

今回の調査から、墳頂部より検出された墓坑底面の高さから推測すると、墳頂部は築造後に1m以上の削平を受けていることが確認できる。このような大規模な削平をうけたのであれば、現状の墳丘測量図から推測した、円墳ないし方墳という墳形の推定は根拠を失う。西側の、方墳ではないかと考えた隅角に挟まれた一面も、後世の改変による可能性がでてきた。城山古墳からその北側には中世の山城の遺構が残されており、城山古墳の現状はその後の城郭造成による、変形の可能性が高い。

今回は、掘り下げのみを行い、実測は次回の調査にゆだねることにした。

調査成果　平成26年度の発掘調査の成果は、以下の通りとなる。①墳端部の基盤層4層の削平が考えられることから、中世に山城の造作の際に削られた可能性が指摘でき、その痕跡として斜面と平坦面の2つの区画が、生じたものと考えられる。②墳頂部には、組合せ式の箱形石棺の部材が散乱され、赤色顔料が塗布されている。調査区からは、墓坑の底部の輪郭が確認された。③第4トレンチ東側には、赤色顔料が塗布された凝灰岩礫が確認されており、この付近に主体部が存在した可能性がある。(江口)

4)まとめ

2014年度夏冬2回の第3・4次調査の成果をまとめると、大久保1号墳の第5トレンチにおいては後円部東側面の墳端と第1段目テラスおよび各段の葺石を確認し、第6トレンチにおいて前方部側面の墳端と葺石が検出され、第1・2次調査の成果と合わせて、前方後円墳の平面形と墳端の高さ及び後円部2段、前方部1段の構造であることが判明した。

大久保2号墳においては、墳頂部に設定した第3トレンチにより、墳頂部が大きく削平され中世に整地されていることが判明し、かろうじて赤色顔料が残る墓坑の底面を発見した。しかし石棺の身はそれと思われる石材も含めて一切発見されず、困惑の印象を残した。

城山古墳では墳端を確認するために設けた第3トレンチで傾斜の異なる掘削面を確認したが、周溝とは確認できず、盛土が予想された墳頂調査区では意外にも表土直下で基盤層が露出し、中央に南北方向の中心主体の墓坑痕跡を確認した。墳頂部は箱形石棺の埋設墓坑の大半が消失するほどの削平を受けていたことが判明した。そうなると測量によって考えられた墳形は、削平後の形状であり、測量時に新たに推定された方墳という形状は後世の変形をうけたのちの形状を、当初の古墳の形状と見誤ったことになろう。

多くの課題点が残された。大久保2号墳は主体部の内容と位置が判然とせず、両古墳とも、築造年代の確定にいたるまでの出土遺物は確認できていない。

2015年度の調査では、これらの点を踏まえ、1号墳では後円部頂の土器の有無、2号墳では石棺の直下を調査したが、詳細については来年度の報告に譲りたい。(田中)

註

(1)別府大学特任教授平尾良光氏の分析による。

(2)諸岡郁・玉川剛司・田中裕介2014「Ⅱ　漆生古墳群」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書4』豊後大野市教委
　諸岡郁・玉川剛司・千原和己・田中裕介2015「Ⅱ　漆生古墳群」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』豊後大野市教委

※なお、第2節および第3節の調査費の一部は、日本学術振興会科学研究費助成事業(基盤研究B)「阿蘇地域を中心とした古墳時代の九州島における情報伝達、文物交流の実証的研究」(課題番号26284122)の資金を利用した。

漆生古墳群写真図版1

遠景

近景

大久保1号墳5トレンチ

大久保1号墳6トレンチ

大久保2号墳3トレンチ

城山古墳墳頂トレンチ

城山古墳墳頂墓壙跡

城山古墳石棺材現状

大久保2号墳石棺

3 大分県下の刳抜式石棺

井大樹

1) はじめに

別府大学ではこれまで、豊後大野市教育委員会協力のもと、3度にわたって漆生古墳群の調査を行ってきた。古墳群を構成する大久保2号墳では、戦前から墳頂部に石棺蓋が露出することが知られ、古墳群の時期や性格を論じる上で重要な要素の1つであった。しかしながら、大分県下の刳抜石棺に関して包括的に論じた研究は少なく、近年の調査成果を踏まえた基礎的なデータの集成が急務であった。

そこで今回は、県下の石棺に関して図面・分布等を改めて整理し、未報告の石棺も含めて悉皆的な調査を行った。その結果、新たな知見を得たので、その点を含め概要についてまとめたい。

2) これまでの研究について

県下の石棺研究に留まらず、近代的な考古学研究が本格的に実施され始めたのは、大正11年（1922）『大分県史跡名勝天然記念物調査報告　第1輯』（大分県史跡名勝天然記念物調査会）（以下、史跡報告と略）の刊行以降である。翌年には、梅原末治が史跡報告委員日名子太郎との交流から大分県内の遺跡について調査し、「豊後北海部郡に於ける二三の古墳」として報文を寄せている。この調査の際、梅原は王ノ瀬石棺について実測し法量、材質等について精緻な観察を行い、県下石棺としては初めての近代的な実測図（図12）を残している。その後も、史跡報告の主たる関心は古墳に向けられ、露出している石棺の幾つかはその際に報告された。

戦後、新たな研究の展開を示したのは賀川光夫である。大分県文化財専門委員として七ッ森古墳、世利門古墳、下山古墳ついて発掘調査を行い石棺構造、埋葬状況の解明に努めた。（賀川 2000）上記の古墳は何れも未盗掘であり、この時期に未露出未盗掘石棺が相次いで発掘調査された意味は大きい。また、賀川は県内の市町村史編纂に関しても数多くかかわり、この中で個別の報告を残している。特に大分市史の中で報告された蓬莱山付近石棺に関しては、戦火により失われ現存しないことから貴重な報文である。

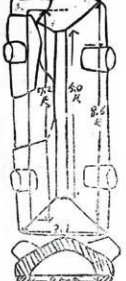
県内の石棺に関して体系的な集成を初めて行ったのは、清水宗昭・高橋徹である。両氏は特に石材に着目し、県内の古墳時代の石棺を石材ごとに整理した。その中で阿蘇溶結凝灰岩加工の石棺に関して、中部九州との地続き的、直接的な影響というよりも、中部九州と畿内との関係において確立した阿蘇溶結凝灰岩石棺文化が、海部の首長と中国、近畿の首長とが関わる中で、間接的に豊後にもたらされたのではないかと指摘した。（清水・高橋 1982）その後、大分では神田高士が研究を引き継ぎ、県内の石棺の形態を基にした編年を作成する中で、共伴遺物から年代を知り得る資料は限られることから、舟形石棺の形態変化（長幅比の減少、石枕の簡略化）に着目した。また、一連の編年作業の中で沖出古墳と共通する特徴のある石棺が分布する点や、出雲、豊後、日向で類似した特徴を持つものがあるなど、遠隔地との関連を指摘した。（神田 1990）また、広域的な視点から、林田は東九州の石棺に着目し検討を行い（林田 1995）、若杉は九州島内の石棺について網羅的に資料化をした。（若杉 1997）

大正十一年十一月

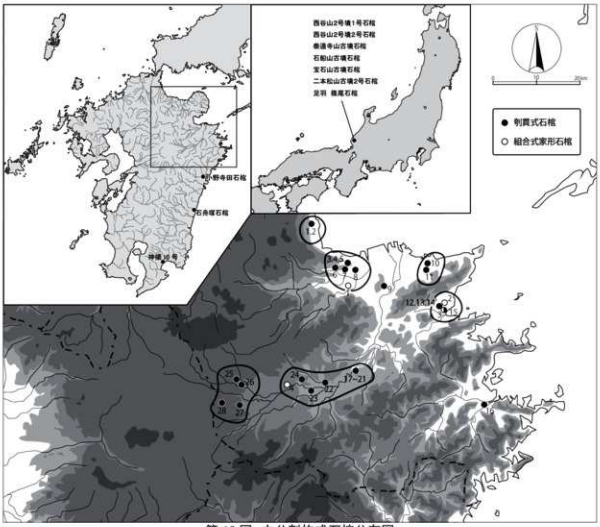
史蹟名勝天然記念物調査報告　第一輯

大分縣史蹟名勝天然記念物調査會

第11図　史跡名勝天然記念物調査報告



第12図　王ノ瀬石棺
梅原作図

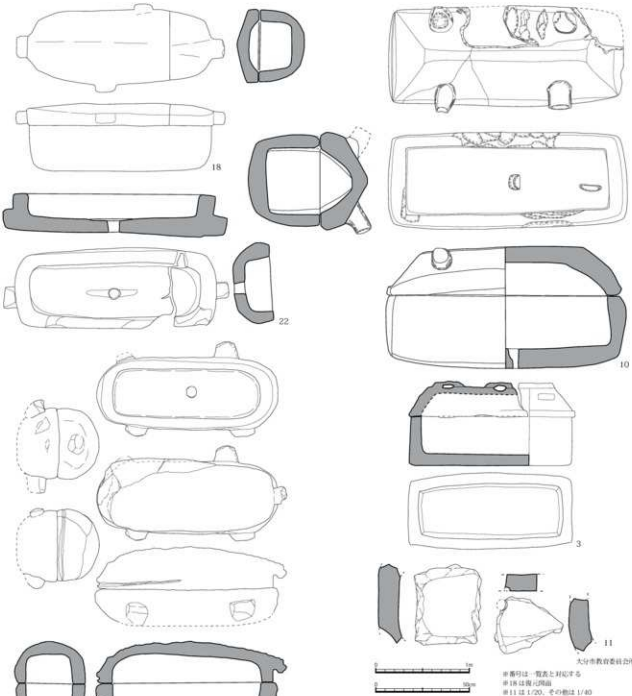


第 13 図　大分刳抜式石棺分布図

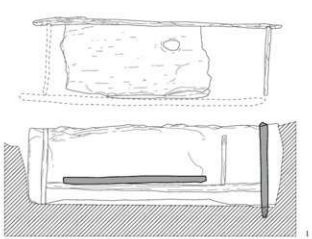
No.	石棺名	所在地	墳形	墳丘規模	部材	石材	分類案			集成記録			
							神田	若杉	林田	清水高橋	神田	若杉	林田
1	芙相寺1号石棺	別府市北石垣			蓋	石英安山岩		東九州IV		●		●	
2	芙相寺2号石棺	別府市北石垣			蓋	石英安山岩		東九州IV		●		●	
3	蓬莱塚附近石棺1（万寿山2号）	大分市大字賀来片面	円墳		蓋・身	凝灰岩?				●		●	●
4	蓬莱塚附近石棺2（万寿山2号）	大分市大字賀来片面	円墳		蓋・身	凝灰岩?							
5	万寿山古墳群1号墳	大分市大字賀来片面	円墳		蓋・身	阿蘇凝灰岩							
6	岩御堂横穴墓	大分市宮苑中村	横穴墓		蓋	阿蘇凝灰岩							
7	壮瑞古墳	大分市賀来	円墳		蓋・身	阿蘇凝灰岩?		東九州V		●		●	
8	永興手人塚古墳	大分市永興加茂	前方後円墳	43m	蓋・身	阿蘇凝灰岩							
9	真豊石棺	大分市松岡			蓋	阿蘇凝灰岩		東九州V				●	
10	王ノ瀬石棺（辻古墳）	大分市坂ノ市	前方後円墳		蓋・身	阿蘇凝灰岩		東九州V		●		●	●
11	亀塚古墳	大分市笛	前方後円墳	116m	身	阿蘇凝灰岩						○	
12	臼塚古墳1号墳	臼杵市稲田	前方後円墳	87m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後A	東九州III	豊後B	●	●	●	●
13	臼塚古墳2号墳	臼杵市稲田	前方後円墳	87m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後A	東九州III	豊後B	●	●	●	●
14	丸山古墳	臼杵市稲田	円墳	10m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後A	東九州III	豊後B		●	●	●
15	仲下山古墳2号石棺	臼杵市諏訪	円墳	20m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後D			○	●	●	●
16	岡ノ谷古墳	佐伯市池田			身	阿蘇凝灰岩					○	○	○
17	鉢ノ崎1号石棺	豊後大野市三重町上田原			蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後B	東九州I	豊後I	●	●	●	●
18	鉢ノ崎3号石棺	豊後大野市三重町上田原			蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後B	東九州I	豊後I		●	●	●
19	鉢ノ崎4号石棺	豊後大野市三重町上田原			蓋	阿蘇凝灰岩	豊後B		豊後I	●	●	●	●
20	鉢ノ崎5号石棺	豊後大野市三重町上田原			身	阿蘇凝灰岩						○	○
21	鉢ノ崎6号石棺	豊後大野市三重町上田原			身	阿蘇凝灰岩						●	
22	潰平4号石棺	豊後大野市三重町小坂			身	阿蘇凝灰岩	豊後B	東九州I	豊後I	○		●	●
23	大久保2号墳	豊後大野市緒方町越生	円墳	30m	蓋	阿蘇凝灰岩		東九州I				●	
24	朝地若宮古墳	豊後大野市朝地町宮生	円墳	約20m	身	阿蘇凝灰岩					○	○	○
25	御祖神社石棺（谷川古墳）	竹田市下原出	円墳	約20m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後C	東九州II	豊後I		●	●	●
26	寺ノ辻古墳	竹田市下原出	円墳	約20m	身	阿蘇凝灰岩				○		○	○
27	七ツ森A号墳	竹田市戸上	円墳	20m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後C	東九州II	豊後I	●	●	●	●
28	石舟石棺	竹田市小塚	円墳	15m	蓋・身	阿蘇凝灰岩	豊後C	東九州II	豊後I	○	●	●	●
組合式家形石棺													
1	浜利門古墳	大分市上芳	円墳？	18m	蓋・身	阿蘇凝灰岩				●		●	
2	高倉古墳	臼杵市大野	円墳？	約20m	？	阿蘇凝灰岩				○		○	
3	下山古墳	臼杵市諏訪	前方後円墳	68m	蓋・身	阿蘇凝灰岩				●		●	
4	朝地丸山古墳	豊後大野市朝地町上尾原	円墳？	15m	蓋	阿蘇凝灰岩			1型b類			●	

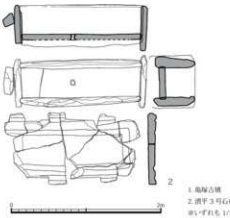
※集成記録の●は図面があるものを示し、○は記述のみ

表：1 大分県刳抜式石棺一覧表

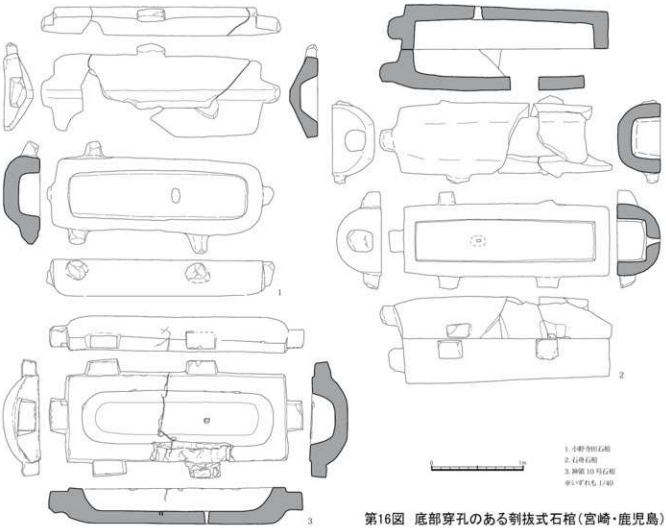


第 14 図　底部穿孔のある刳抜式石棺（大分）





第 15 図　底部穿孔のある箱式石棺（大分）



第16図　底部穿孔のある刳抜式石棺（宮崎・鹿児島）

3) 大分における石棺の分布

今回の調査で 32 例の石棺を確認することができた。その分布は別府以南であり、幾つかの集合がみられる。以下個別の地域について述べたい。

・春木川流域

別府地域では実相寺古墳群において 2 例の石棺がみられる。どの古墳に伴うかはわかっておらず、古墳公園内に安置されている。いずれの石棺も、鶴見火山群の噴火によって堆積した安山岩で造られている。

・大分川下流域

大分市では、大分川下流域に数多くの石棺が集中している。蓬莱塚附近石棺 2 や万寿山 1 号石棺、永興千人塚石棺にみられる様に蓋や身の外面隅を切断し、面取り加工する特徴がみられる。また、蓬莱山附近石棺 1、世利門古墳ではコの字状に突出させた棟を造りだし、そこに横方向からやや楕円形の孔を 2 か所穿つ。この特徴は臼杵湾岸城にもみられるので地域間の関連性が指摘される。

・丹生川流域

研究史でも述べたが、戦前から王ノ瀬石棺が発見され、畿内的な石棺として注目されてきた。明治初年頃道路改修時に発見されたと以前から伝えられてきたが、どの様な古墳に伴うかは長年不明のままであった。しかし、2004 年辻古墳の報告の際に高畠豊（高畠 2004）によって精緻な記録調査が行われ、辻古墳に伴うことが明らかになった。亀塚古墳では 1994 年、墳頂部の主体部調査が行われ、結晶緑泥片岩の組合せ箱式石棺（第 1 主体部）と凝灰岩製刳貫石棺（第 2 主体部）の存在が明らかになった。しかし、第 2 主体の石棺に関してはその詳細が報告されることが少なかったので、今回は大分市教育委員会の協力を得てその一部を報告したい。

・臼杵湾岸地域

臼杵城では臼塚 2 号石棺、下山古墳石棺、神下山古墳石棺の蓋に浅く掘り窪めた装飾が施される。また、神下山古墳石棺にみられる屋根棟部穿孔は、先ほど述べたように大分川下流域の石棺にもみられることから製作工人間の関係が推察される。

・大野川中流域

県内で最も多く刳抜式石棺が集中している地域である。平面形態は小口が丸みを持ち隅丸方形であり、後述するが底部に穿孔をもつ石棺も多数存在する。また、鉢ノ窪石棺群に認められるように、前方後円墳や大型の円墳の主体部ではなく、小型低墳丘の円墳に用いられるようである。

・大野川上流域

神田氏が指摘するように、沖出古墳に類似する石棺が多く確認されている（神田 1990）。長軸小口のみに縄掛け突起が用いられ、左右で小口の大きさが異なるもの特徴である。出土遺物は確認されていないが長幅比、沖出古墳との形態類似から比較的古い石棺群ではないかと考えられている。

4) 底部穿孔のある石棺群

今回、県内の石棺を実際に調査し観察する中で、底部に穿孔をもつ石棺があらためて認められた。これまでの研究史上、王ノ瀬石棺、潰平 4 号石棺、鉢ノ窪 3 号に関しては、以前からその事実が報告されていたが、新たに 4 例確認することができた。ここでは事実報告をもとに、他地域との関連性について指摘したい。また、これまでこの様な穿孔について“水抜き孔”“排水孔”等と表記されることがあり、おそらく機能はそのようなものと推察されるが、機能に関する確かな例を得ないので、ここでは“底部穿孔”と統一した名称を用いたい。

戦火により現在は失われてしまった蓬莱山附近石棺 1 は、これまで大分市史による賀川氏の報文によるところが大きかった。しかし、今回資料を集める中で 1932 年佐藤藏太郎によって写真付きで紹介された資料を確認できた。その中では「尚身の頭部側面向かつて右下の隅に徑二寸位の小孔が穿たれ、内部に通じてゐるが、これは内部の汚水等の流出口のために穿つたものと想わはれる。」（佐藤 1932）とあり穿孔があったことがわかる。しかし、石棺はこの報告の約 20 数年前に発掘されて、大分第一高女に運び込まれたものであり、後世に穿かれた可能性もある。だが、共通する棺身、角状縄かけ突起をもつ王ノ瀬石棺には底部穿孔が認められるため、石棺製作時の穿孔の可能性についてここでは指摘しておきたい。

亀塚古墳の第2主体部が刳抜石棺であることは以前から知られていたが、その詳細については不明であった。だが、今回大分市教育委員会の協力を得て、コンテナ 3 箱分の石棺材について調査することができ、そのうち比較的大きな2片について図化した。2つとも底部片で長軸の幅は不明だが、短軸の幅については 32 ㎝程度であり小型の石棺であると考えられる。また、棺材の一部には底部穿孔の跡が残り、石棺底部及び穿孔部壁にはベンガラが塗布されている。穿孔の形状は円形と考えられ、復元径は 5、6 ㎝である。また、亀塚古墳の第 1 主体部についても改めて確認すると底板に孔があり、実態に関して不明な点が残るものの底部穿孔の可能性が指摘される。これについては、潰平石棺群において組合せ箱式石棺に明らかに底部穿孔が施された例があり、刳抜式石棺のみならず箱式石棺においても、この特徴的な構造的共通性が認められたからである。なお、亀塚古墳第1主体部は後世に相当の盗掘を受けているため、その際の破損の可能性もある。

鉢ノ窪 1 号石棺は、三重町史に詳細な図面が報告されていたが内部の構造については不明であった。しかし、豊後大野市教育委員会諸岡郁の調査の結果、棺身中央部に約 10 ㎝の円形底部穿孔があることがわかった。石棺形状には異なる点がみられるものの、3 号石棺において同様の穿孔がみられる。

このように大分県の刳抜式石棺には多くの底部穿孔をもつ石棺があることがわかった。重要な点は刳抜式石棺のみならず組合せ箱式石棺においても同様の特徴がみられたことであり、先述したように仮に亀塚古墳第1主体部において認められれば、その穿孔の年代は中期初頭まで遡ることとなる。第1主体部のものが後世の破壊によるものだったとしても、第2主体部の刳抜式石棺にはみられるので、中期前葉まで遡ることは確実である。

では、他地域にこのような特徴を持つ石棺は存在するのだろうか。全国的にこの点を検討すると福井、宮崎、鹿児島に底部穿孔をもつ石棺をみることができる。ここでは特に宮崎、鹿児島の例を紹介したい。

大分に最も近い位置にあるのは延岡の小野寺田石棺である。蓋は小口に各一、長辺に各 1 つ縄かけ突起

をもち、頂部には小口の縄かけ突起に続くように幅 10 cm程度の棟がみられる。身には小口に各 1 つ、長辺には各 2 つ縄かけ突起をもつ。底部穿孔は中央からややずれた位置に穿たれている。

宮崎平野の持田古墳群では約 45m の前方後円墳（16 号墳、石舟塚）に舟形石棺が採用される。蓋、身共に小口に各 1 つ長辺に各2つの縄かけ突起をもつ。身の断面は半円状で、縄かけ突起は柱状である。底部の中央からややずれた位置に穿孔があり、長軸方向にやや楕円形である。

鹿児島県志布志湾地域では 2006 年から 2008 年にかけて神領 10 号墳の発掘調査が実施された。その結果、約 54m の前方後円墳であり、後円部墳頂からは刳抜式石棺が発見された（橋本 2010）。蓋、身共に小口に各 1 つ長辺に各2つの縄かけ突起をもち、平面形態は棺身自体は長方形だが内面の刳り込みは小口部が丸くなっている。底部に穿孔が認められるがこれも中心からややずれており、その形は方形である。また、この石棺については石材の科学分析がなされており、志布志市南東部の海岸で採取された可能性が高いことが指摘された（大木、古澤、橋本 2011）。また、以上のような科学分析の結果や、この様に九州東岸（宮崎・鹿児島）の穿孔をもつ刳抜式抜石棺について、これらの石棺の棺身において縄かけ突起が小口に各 1 つ長辺に各 2 つあるなど、穿孔以外の共通性から九州東岸における石棺工人の広域交流（橋本 2010）、つまりは石棺工人が現地に移動し、現地の石材で石棺を製作するという一連の過程が示されたと考える。

また、このような底部に穿孔を施すという現象が、同時に遠隔地で発生するのか、もしくは特定の地域を発信源とするのかについて疑問を残す結果となった。ただ、今回大分県に於いて箱式石棺にも底部穿孔がみられた意義は大きく、刳抜式石棺のみならず同時代的主体部の総合的検討が必要であると考えられる。今後は全国的な検討を行いながら、技術的特徴が遠隔地間で共通する意味について議論を深めていきたい。

今回の報告にあたっては大分市教育委員会、大崎町教育委員会、佐伯市教育委員会、豊後大野市教育委員会、別府大学考古学研究室、安藤博行、大久保忠士、小野綾夏、清水宗昭、下村智、田中裕介、玉川剛司、野口直哉、橋本達也、諸岡郁、若杉竜太（敬称略、五十音順）に調査のご協力、ご指導を頂きました。末筆ながら感謝の意を表します。

【参考・引用文献】

石橋宏　2013『古墳時代石棺秩序の復元的研究』六一書房

大木公彦、古澤明、橋本達也　2011「大隅半島の神領 10 号墳石棺の岩石学的考察」（『鹿児島大学理学部紀要』44：9 - 13）

賀川光夫 2000『考古叢帖』別府大学史学研究会・大分県考古学会

神田高士　1990「大分の舟形石棺」（『おおいた考古』3：10 - 29）

佐藤藏太郎　1932「古墳研究」（『豊府古蹟研究』7：1 - 28）郷土史蹟傳説研究會

清水宗昭・高橋徹　1982「大分の石棺」（『九州考古学』56：1 - 17）九州考古学会

高畠豊 2004「辻古墳群」（『大分市埋蔵文化財調査報告書』51）大分市教育委員会

橋本達也　2010「古墳築造南限域の前方後円墳－鹿児島県神領 10 号墳の発掘調査とその意義－」（『考古学雑誌』94（3）：65 - 79）日本考古学会

林田和人　1995「東九州の舟形石棺」（『宮崎考古』14：33 - 52）宮崎考古学会

若杉竜太　1997「九州石棺考」（『先史学・考古学研究』Ⅱ）龍田考古会

※紙幅の関係上主要なものに限り、報告書等は個別の遺跡名のものを使用した。

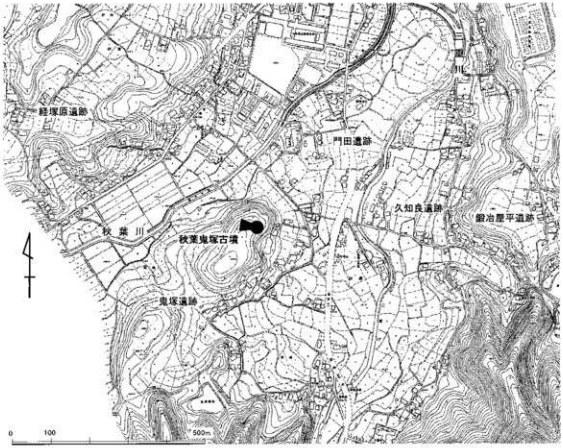
Ⅲ　秋葉鬼塚古墳（2次調査）

1　調査に至る経緯

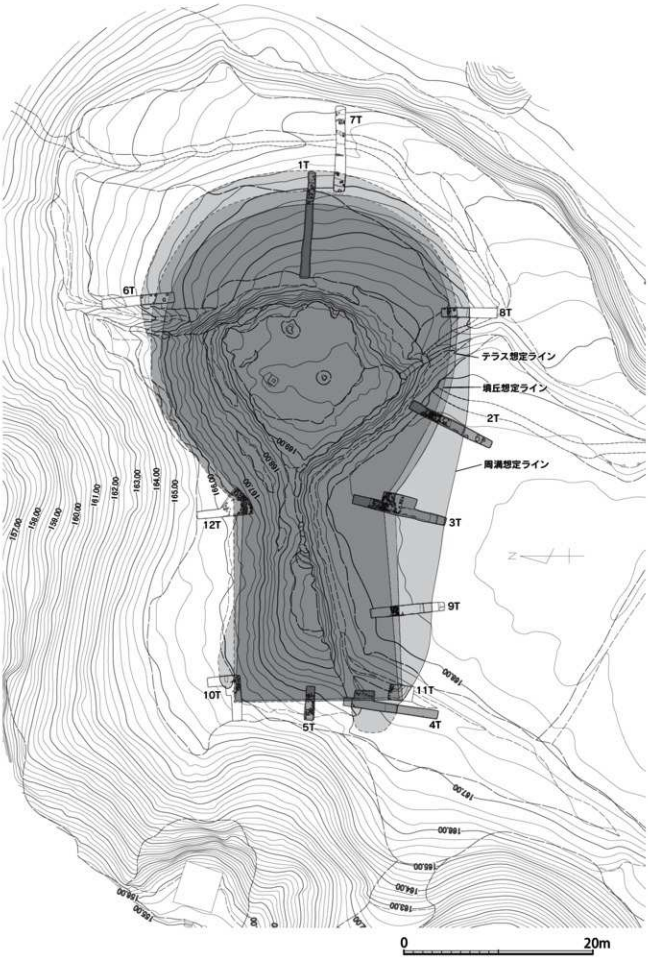
秋葉鬼塚古墳は大野川中流域に8基分布する前方後円墳の一つで、三重盆地を南側から見下ろす標高166m程の台地先端上に立地する。主体部の状況や時期推定できる出土遺物等はこれまで知られてなく、墳丘も東側から南側にかけて掘削により失われるなど改変を受けている。大分県史跡指定に伴ない平成5年に測量調査が行われ、旧状を残す北側墳丘から推定して、全長は50m程の規模とみられていた。

平成25年度に再度墳丘測量を行い、トレンチ5箇所による試掘確認調査を実施して築造当初の規模や形態の把握を試みたところ、特に南側掘削部分の第2・第3トレンチの2箇所で墳端の葺石を検出し、テラスや周溝が存在することも確認できた。それ以外のトレンチでは墳端遺構は明確ではなかったが、墳丘測量による地形から全長は51mと推定されている(玉川 2015)。また、壺形埴輪の出土により中期初頭頃の築造であることも判明した(田中 2015)。

しかし、それ以外のトレンチでは葺石の残りが悪く、全長を墳端で押さえることができなかったなど不十分な点もあるため、平成26年度も継続して2次調査を実施した。1次調査の第1～5トレンチの補足として第6～12トレンチの7箇所を設定し、計51㎡を人力で掘下げて実施した。第1トレンチの近接位置の第7トレンチは後円部東端の確認を目的とし、第6・8トレンチは後円部南北の墳端の確認、第9トレンチは前方部端の確認、第10・11トレンチは前方部南北の隅角の確認、第12トレンチは北側くびれ部確認をそれぞれ目指して設定した。



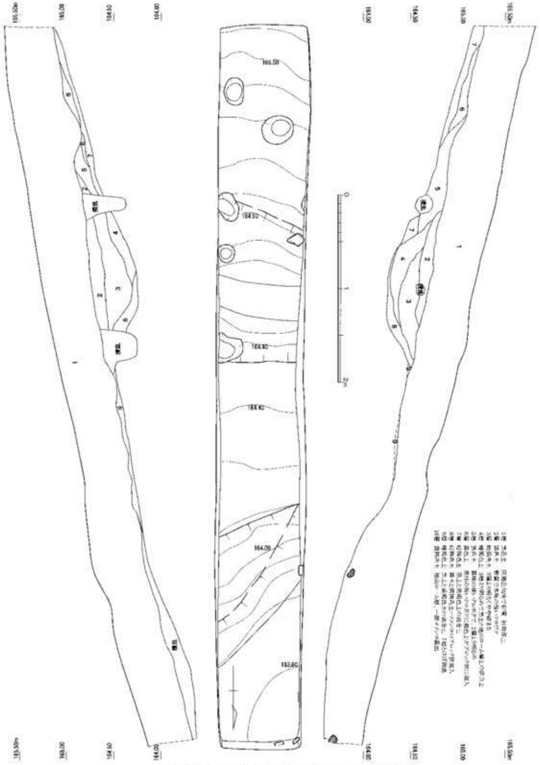
第17図　秋葉鬼塚古墳周辺地形図



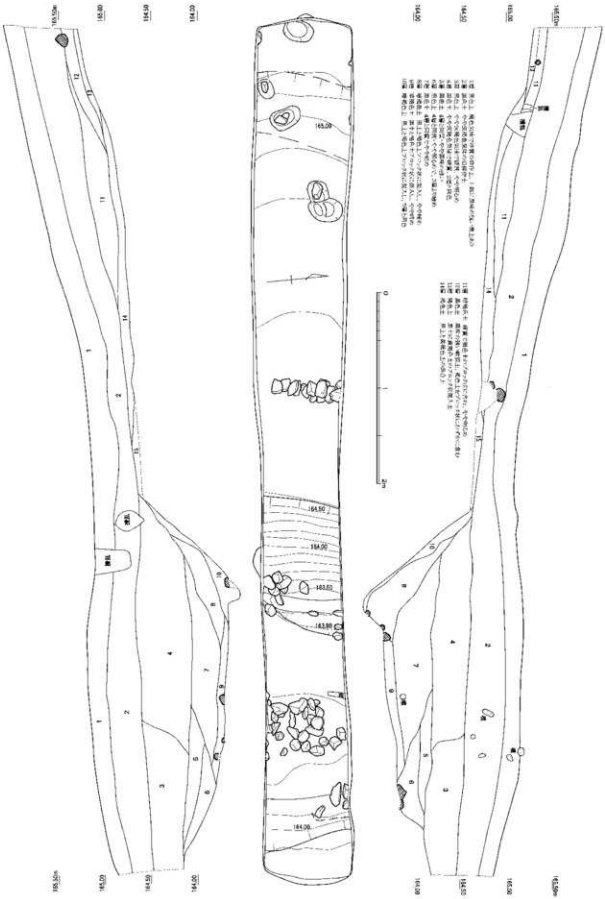
第18図　秋葉鬼塚古墳調査トレンチ位置図（玉川作成）

2 確認調査の概要

第6トレンチ　後円部を中心に円形状に等高線が巡る畑跡の傾斜地上で、後円部の北端検出を目的に幅1m長さ7.7mをほぼ南北に掘り下げた。トレンチ中央よりやや南よりに溝状の掘込みを検出し、溝の幅は約1.6m、検出面より深さは0.4mで、溝底部の標高は164.25mである。溝内部の覆土は黒色土と地山黄褐色土の混入土が交互に堆積することから、周溝と思われる。南側斜面には1次調査でみられた盛土と考えられる土層(7層)に礫が若干混入しているのが確認できるが、残りは良くなく葺石としての配置ではない。墳端あるいはテラスの可能性もあるが、周溝は著しく削平された状態での検出とみられ、共に確認できない。遺物はわずかな土器片のみの出土である。



第19図　秋葉鬼塚古墳　第6トレンチ実測図



第20図 秋葉鬼塚古墳 第7トレンチ実測図

また、トレンチ北端の溝状掘込みは畑跡に伴うもので、他に時期不明の柱穴状の掘込みもいくつかあるがいずれも後世のものとみられる。

第7トレンチ　第1トレンチの南側に並行して後円部の東端検出を目的に設定し、幅1m長さ9.1mで東西方向で掘り下げた。地形は後円部掘削面より東側へ下降する傾斜面に幅1mの里道跡を含むほぼ平坦面があり、さらに切岸状の急崖へと続くが、トレンチは傾斜面より里道跡を越えて急崖直前までの範囲である。

地山層の傾斜変化する落込みをトレンチ西側、第1トレンチと同様の位置で検出した。礫はいくつか確認できたがやはり葺石としての配置ではなく、柱穴状の掘込みに堆積した状況である。この位置の土層などから周溝底部の一部の可能性もあり、傾斜変化の落込みは墳端かテラス端の痕跡とも考えられるが、削平が著しいため不明確である。落込みの標高は164.9mである。遺物は全く出土していない。

トレンチ中央付近の里道跡付近の位置で石列を検出している。石材は葺石とほぼ同じ円礫で、2～3段に積まれて南北に続いている。土塁状の遺構の石積みにも見えるが、攪乱土層中のため古墳に伴うものではないと考えられる。

トレンチ中央より東側に規模の大きな掘込みが検出されている。幅は35m程で、検出面からの深さは1.2mにもなる。断面逆台形状の溝と思われるが、西側の傾斜面は50°の急角度で、底部は一段深く掘込まれて外側に向かってゆるやかに上昇して崖際へと続く。溝底付近の標高は163.5mで、礫が堆積することから、葺石の一部が転落したものと思われる。遺物は全く出土せず時期は不明であるが、覆土の層が周溝とは異なり攪乱層に似ていることや、深さや断面形態などから、古墳の周溝ではなく後世の遺構と判断したい。

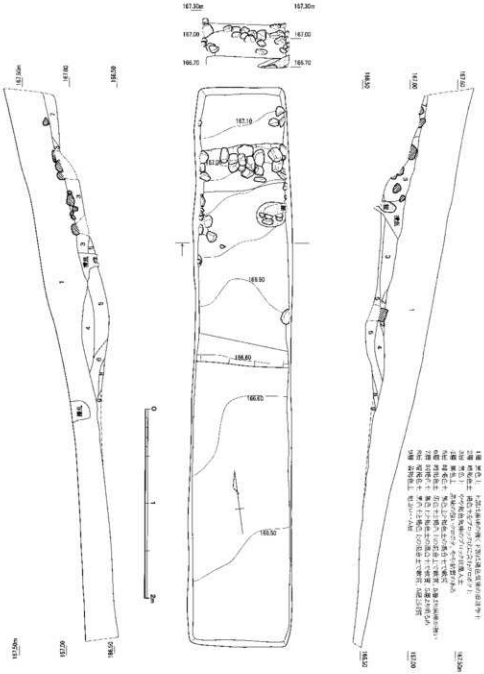
第8トレンチ　後円部南端の検出を目的に幅1m長さ5.9mで、第6・第7トレンチと同じ畑跡の傾斜地形上に設定した。トレンチ北側で溝状の掘込および北側斜面に礫の集中箇所を検出した。礫は盛土層の斜面上に河原石を配置していることから墳端の葺石と思われる。しかし残りは良くなく部分的に本来の位置を留めているのみで、基底石は確認できない。墳端の標高は166.8mであろうか。テラスについては明確ではないが、1m程の平坦状の土層がみられ存在が示唆される。

溝底部には盛土層などの堆積状況により周溝と考えられる。断面は逆台形状を呈すると思われるが、削平によるためか検出面からの深さは20cmと浅く、トレンチ中央付近で掘込みの立ち上がりをわずかに検出できた程度である。検出幅は2.3m、標高は溝底付近で166.5mである。

出土遺物について、甕形土器の胴部片(27図10)が葺石直下の盛土層内より出土するなど土師器片のみで、埴輪については全く出土していない。

第9トレンチ　1次調査の第3・第4トレンチ間の前方部南端の検出を目的に、幅1m長さ7.3mを掘り下げた。トレンチ中央付近には溝状の掘り込み及び葺石を検出し、第2・3トレンチとほぼ同じ黒色土と褐色気味の土層の堆積状況から周溝と思われる。盛土層(10層)に葺石を配置しており、角度は21°の斜面で検出している。墳端の標高は167.2mで、基底石は墳丘の葺石と同様の礫である。外側は傾斜角度が10°程の平坦状でテラスを設けており、小型の礫が確認できることから意図的に大きさで区別した葺石配置と思われる。テラスの礫は端までは残っておらずテラス幅は明確ではないが、40～60cm程で傾斜角度がわずかに変わるため、第3トレンチより幅は狭まるとみられる。

周溝底部は南側に向かってやや深めに掘られ、約2m幅で急角度に立ち上がるが、途中で傾斜を変化させている。底部標高はテラス付近では167.1m、外側は166.6mで、溝の幅は4.3mである。周溝は地山ローム層を掘り込んでいるが、盛土(11a～d層)による整地層が約20cmの深さで検出されている。

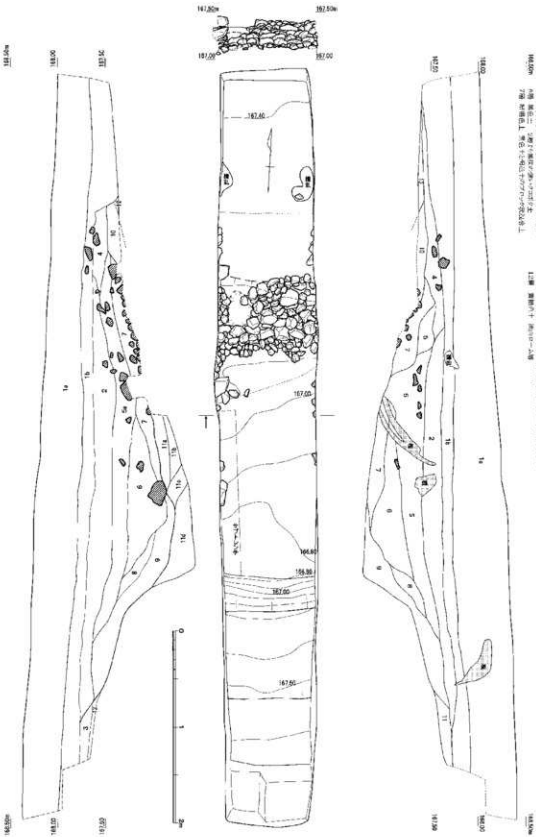


第21図　秋葉鬼塚古墳　第8トレンチ実測図

第10トレンチ　前方部の北端隅の検出を目的に、L字形に延べ7.7㎡で掘り下げた。トレンチ東南隅付近で盛土に礫の集中箇所があることから、前方部隅角付近の墳丘と思われるが、攪乱の痕跡もあり葺石の残りも良好とはいえない。礫は大型のものがいくつかみられるが、基底石やテラスは確認できない。

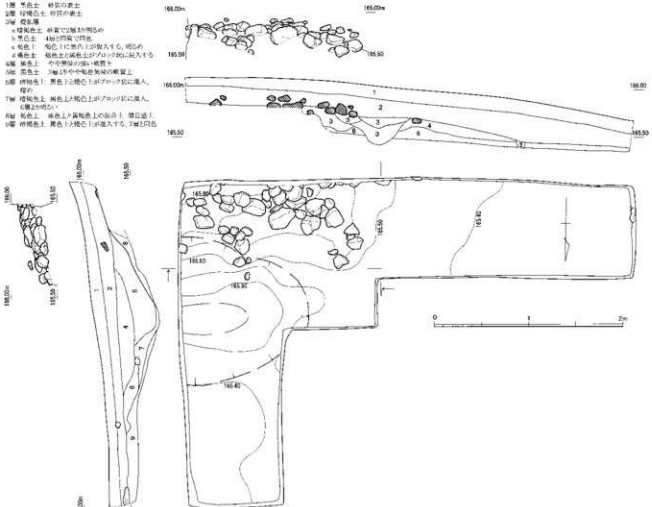
葺石の北側に接して浅い掘込みがあり、南北幅は1.4m、検出面からの深さは0.3mで、東側調査区外に向かって続く周溝とみられる。一方、西側には墳丘斜面から地形に沿って傾斜する地山で掘込みはなく、周溝は途切れるように浅くなっており、前方部北側のみ設けられているようにみえる。遺物は壺形埴輪片がわずかに検出している。

第11トレンチ　前方部の南端隅の検出を目的に、1次調査の第4トレンチに隣接して幅1.6m長さ2.6mで掘り下げた。トレンチ北西から南東方向へやや屈曲して続く溝状の掘込みと、北東側で盛土層を検出した。盛土は削平が著しく、一部樹木根などによる攪乱が著しいが、概ね方形状を呈していて礫がわずかに確認できる。東側延長上は第3・第9トレンチの墳端に続き、北側延長上は第4トレンチで検出した盛土部分に続く位置でもあるため、前方部の南側隅角で

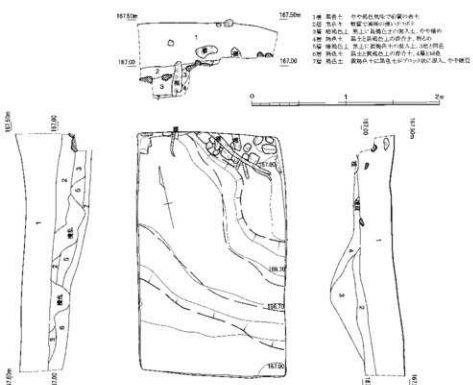


第22図　秋葉鬼塚古墳　第9トレンチ実測図

あると考えられる。葺石の残りは良好でなく、基底石もテラスも確認できない。溝が周溝であれば幅が1m、検出面からの深さが40cmと極端に狭く浅いが、溝底部の標高は166.6mで第8～9トレンチから概ね同じレベルで続くと思われる。



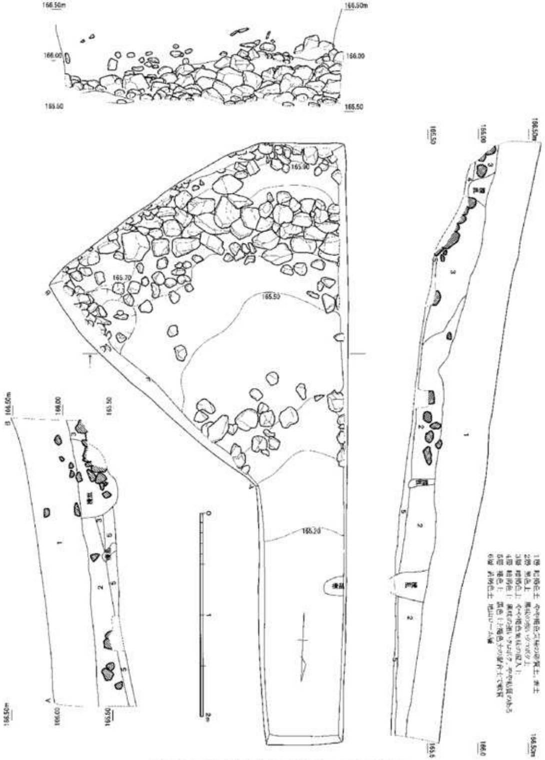
第23図　秋葉鬼塚古墳　第10トレンチ実測図



第24図　秋葉鬼塚古墳　第11トレンチ実測図

第12トレンチ　北側くびれ部の墳端検出を目的に、幅0.9m長さ5.9mに東南側に三角形状に拡張し、計8.8㎡を掘り下げた。トレンチ南側に盛土層の斜面上に礫の集中箇所を検出し、葺石と思われる。人頭大など大きめの礫が多く、約30°の傾斜で東西方向に直線列状の配置のため、前方部側の墳端と思われる。標高は165.6mで、基底石は墳丘と同じ礫と思われる。東端側で盛土面がわずかに屈曲する様相がみられ、くびれ部位置と考えられるが、攪乱のためか葺石の配置としては明確ではない。また、墳端から約50cm南側の標高165.8m付近で葺石の希薄な平坦面があるが、攪乱による可能性もあり、段築面かどうかは不明である。

墳端北側には盛土層が緩やかに下降して続き、墳丘よりやや小さめの拳大程の礫がいくつか見られることから、テラスの可能性がある。しかし盛土と堆積土の区別が困難で土層からは判断できず、墳端より2m 程北側に見られる礫も転



第25図　秋葉鬼塚古墳　第12トレンチ実測図

落石の可能性があり、第3トレンチのような明確なテラス面ではなく、幅等は確認できなかった。

トレンチ北側は傾斜面に続くため、周溝らしき掘込みは確認できない。第10トレンチで確認できた周溝は12トレンチまでは続いていないのか、あるいは土砂流失により失われたのか判断できない。

3 確認調査のまとめ

平成25・26年度にわたって計12カ所のトレンチ調査を実施し、東側掘削面に近い第1・6・7・8トレンチは削平が著く、周溝の底がわずかに検出できた程度で墳端はほとんど残ってなかった。一方、南側掘削面の第2・3・9トレンチでは削平が墳端までは及んでなく、周溝及び墳端にテラスの存在が確認でき、葺石も一部失われた程度でほぼ良好であった。前方部も葺石の残りは良くないが、盛土層の範囲から規模の推定の手掛かりになると思われる。

後円部については、第3・12トレンチのくびれ部から第2・8トレンチの墳端を辿って復元すると、南北31m東西32m程のやや楕円形気味と考えられる。前方部は長さ20m、くびれ部幅は15m、前端幅は17mとあまり広がらない前方部形態で、全長は52mという測量調査の所見に近い規模と推定される。墳端テラスについては全周囲に存在したかどうかは不明で、特に前端付近は存在したかも明確ではない。今のところ墳丘南側以外は推定であるが、後円部からくびれ部にかけて幅は約1.5m、前方部は0.6m弱で検出し、後円部に比べ前方部は狭まる傾向がうかがえる。第1・7トレンチの傾斜変化の落込みについてはテラス端にしては大きく張出すことから、周溝底部の痕跡であろうか。

周溝についても全周の確認までは至っていないが、第3トレンチのようにくびれ部に近い側は周溝幅も広く、前方部側は狭まるように続く馬蹄形状に設けられていたと考えられる。しかし前方部南側隅角付近では台地崖面に続き、北側隅角付近は掘り残すような構造が見受けられる。

各トレンチの墳端及び周溝底の標高に高低差があるが、墳丘南側に比べ北側は低く最大2m以上の比高差があり、南北方向に傾斜して築造されている。台地上の先端傾斜面という立地地形に起因することも考えられるが、三重盆地側に面している北方向からの側面観をより重視して築造された可能性が指摘されている(玉川2015)。北側周溝の掘込みが浅いことや、墳丘の葺石が大きめの礫が多く見受けられる要因とも考えられる。

築造時期については壺形埴輪の出土により5世紀初頭と考えられるもので、この三重盆地地域では道ノ上古墳とほぼ同時期で、関連が注目されている(田中2015)。特に第3・12トレンチのくびれ部に出土量が集中していたが、すべて覆土からで樹立位置を推定できる状況ではなかった。円筒埴輪は小破片がわずか2点のみで壺形埴輪よりかなり少ないが、いずれも前方部側で確認されていることから、前方部に少数の配置であった可能性がある。

なお、古墳に伴わないと思われる溝や柱穴状掘込み等の遺構が一部のトレンチで検出されているが、共伴する遺物が全くなく詳細は不明である。今回は古墳以外の視点での考察は行っていないが、トレンチ内や表面採集の遺物には縄文土器から近代の陶磁器まで様々な時期があり、特に中世から墳丘の削平が行われていた可能性も指摘されている(玉川2015)。第7トレンチ東端で確認できた溝状遺構を含め、複合遺跡としての検討も今後の課題と思われる。

参考文献

田中裕介2015「秋葉鬼塚古墳出土遺物」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』豊後大野市教育委員会

玉川剛司2015「秋葉鬼塚古墳測量調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』豊後大野市教育委員会

3　秋葉鬼塚古墳出土埴輪ほか

田中裕介

2015年の調査概報(註1)の中で速報したように、秋葉鬼塚古墳からは壺形埴輪が比較的多く出土した。その中に数点であるが円筒埴輪の破片が見つかった。今回はそれを報告し、あわせて秋葉鬼塚古墳の埴輪群の特徴に触れる。

円筒埴輪　第27図1は第9トレンチから出土した円筒埴輪の胴部突帯付近の破片である。2は表採された胴部片で、円形透かしの一部が残る。いずれも胎土は砂粒を多く含む粗い胎土であるが、土師器とは異なり角閃石が少なく、かわりに比較的大きな片岩をふくむ。胎土は壺形埴輪と共通する。1は上部が欠けているため突帯の断面形状ははっきりしないが、突帯貼り付け前の粗い1次調整のタテハケ痕が残り、内面は指圧痕の残るナデ調整である。2はやや不整な円形透かし穴がのこる破片で、1と同じ粗い外面タテハケ、内面ナナメナケが残る。ハケの条痕は1センチ当たり3～4本できわめて粗い。厚さは2点とも1センチをこえる厚さで、2には黒斑が残る。

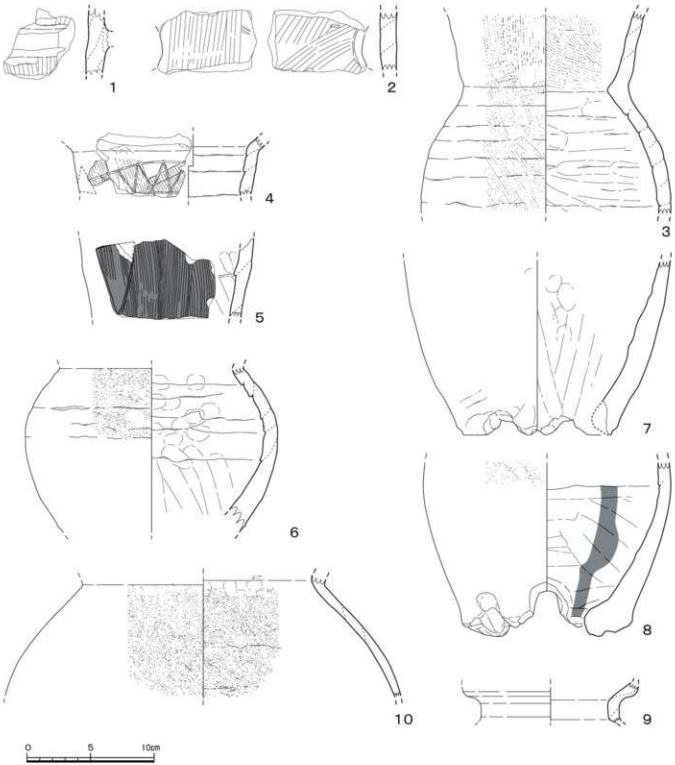
壺形埴輪は例外なく昨年報告した個体と基本的に共通する比較的小ぶりな壺形埴輪である。底部は開放成形、口縁は上位三分の一付近で外側に屈曲外反する特徴がある。単口縁のみで二重口縁がないことは変わらない。胴部はやや長胴化し、底部は乾燥時に渡した棒状の工具によるへこみが顕著に観察される。内外面は口縁部下半から胴部上半にかけて粘土紐の接合痕が残り、内面下半は粗い指ケズリがみとめられる。胴部上半から口縁外面と内面上半にはハケ目が施される。3は胴部上半から口縁部下半にかけてであるが、胴部は内外面とも接合痕が残り、ハケ調整が行き届いているのは口縁のみである。4は同様な口縁片であるが、外面に三角形になると推定される透かし穴と横方向の2本の沈線があり、その間に鋸歯文が線刻されている。5も同じ位置の破片であるが、逆三角形の線刻が深くきざまれ、赤色顔料の塗布が著しい。頸部の三角の透かし穴を施す例は昨年の概報でも報告しており、その施文あり方は何種類かありそうである。6は胴部片、7と8は底部片で底部の器壁は非常に厚くかつ粗い作りである。8の内面には、赤色顔料のしたたりがのこる。

土師器　壺と甕の胴部破片が出土している。胎土はいずれもこの地域の地質を特徴づける火山堆積物に由来する角閃石が目立つ。9は短く直立したのち屈曲する二重口縁の壺頸部片である。10は大型の甕胴部上半で、なで肩の形態から布留式の系譜をひくと考えられ、内外面を細かいハケで丁寧に調整する。

まとめ　第2次調査で秋葉鬼塚古墳に円筒埴輪が伴うことが明確になった。わずか2点であるがその特徴は、壺形埴輪の年代観である中期前葉の穴窯焼成以前という昨年の検討結果と一致する。さらに壺形埴輪には頸部の線刻や透かし穴を施す例が散見され、その量と合わせて考えると、秋葉鬼塚古墳の埴輪祭祀においては壺形埴輪が主体的に使用されたことは容易に想像できる。一方、家形埴輪や器財埴輪等は一点もなく、円筒埴輪もきわめて少数が使用されたと考えられる。円筒埴輪がきわめて少ない埴輪の構成は三重地域でも道上古墳、立野古墳でも指摘される。

註1　田中裕介2015「秋葉鬼塚古墳出土遺物」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5―平成25年度調査―』
　　豊後大野市教育委員会

＊なお埴輪の実測には井大樹・江口寛基(別大大学院1年)と田中があたった。



第26図　秋葉鬼塚古墳出土遺物実測図

第6トレンチ　　第7トレンチ

第7トレンチ　　第8トレンチ

第8トレンチ　　第9トレンチ

第9トレンチ

第10トレンチ

第10トレンチ

第11トレンチ

第12トレンチ

第12トレンチ

Ⅳ 坊ノ原古墳

1 坊ノ原古墳墳丘測量調査について

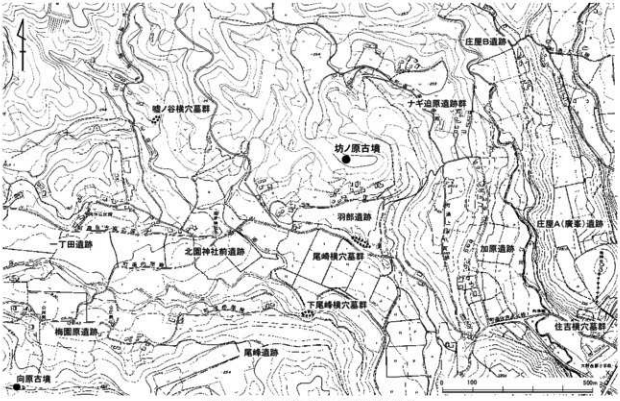
玉川剛司

1) はじめに

坊ノ原古墳は、豊後大野市大野町桑原地区の北西から東西方向へと屈曲して延びる標高 250 mの台地上に立地する前方後円墳で、昭和 51 年 3 月 30 日に大分県の指定史跡に登録されている。地元では、古くから「ひょうたん塚」と呼ばれており、現況の墳形がくびれ部から前方端部にかけて大きく括れている形状から呼称されてきたものと考えられる。周辺古墳時代の遺跡としては、坊ノ原古墳が立地している台地から南側に延びる台地縁辺に尾崎横穴墓群、同丘陵の西側の谷深部南側斜面には嘘ノ谷横穴墓群が存在する。また、古墳南側の谷を挟んだ丘陵北斜面には下尾峰横穴墓群、同丘陵西側の尾根上には向原古墳が立地している。坊ノ原古墳の東側の台地南端には住吉横穴墓群が存在するなど、多くの古墳時代の遺跡が立地している重要な地域である。

この地域から南西側の国道 57 号線を挟んだ南側の台地には、用作古墳、丸山古墳、高伏古墳、狐迫古墳、若宮古墳などの円墳が尾根上に集中して立地していることから、坊ノ原古墳が立地する地域も含め、大野川の北岸の大野郡を東西に横断する重要な交通の要衝であったことが推定される。また、このルートについては、岡城路の犬飼道が分岐していることとも一致していることから、近世まで続く重要な交通路であったことが伺える（佐藤 1986）。

坊ノ原古墳が立地する地域は、昭和 50 年度から実施された畑地帯総合開発事業の関連で、大野原台地の大規模発掘調査が行われた。これらの関連調査の一環で、坊ノ原古墳の平板測量が実施され初めて紹介された（清水 1980）。この測量調査の結果、全長 46 m、後円径 26 m、後円高 4 m、前方長 19 m、幅 10 m（復元）、前方高 2 mを測る前方後円墳で、前方部が低く細長い古式の特徴を残していることから 4 ～ 5 世紀の築造で



第27図 坊ノ原古墳 周辺地形図

あると推定されると報告されている（清水 1980・賀川ほか 1980）。その後、1988 年 9 月に前方後円墳集成に関る実査が行われた（綿貫 1992）。

2）調査に至るまでの経過

坊ノ原古墳は、細長い台地がひらけた尾根上に前方部を北西側に向けて築造されている前方後円墳で、昭和 55 年に『大野原の遺跡』で初めて測量図が紹介された。この時作製された測量図は、後円部の最高標高地点を 0 mとする 50cm 間隔の等高線図である（清水 1980）。このような調査歴のなか、豊後大野市では、平成 22 年度から市内所在の前方後円墳を対象とした、精緻な測量図の作成および、墳丘規模・周溝の有無等の確認の発掘調査を目的としたプロジェクトの実施している（玉川 2012、2014、2015）。その一環として坊ノ原古墳が今回対象となり、市教育委員会の依頼のもと、変化点測量法（玉川 2003・2004）による墳丘測量調査を行った。墳丘測量調査実施にあたり、あらかじめ市教委が準備した計 2 本の世界測地系の座標による基準点[10]をもとに必要に応じて補助杭を設定した。

墳丘測量調査は、別府大学文化財研究所の玉川剛司の指導のもと、井大樹、安部和城（別府大学大学院文学研究科 1 年）、塩見恭平、髙木慎太郎（別府大学史学・文化財学科 2 年）が参加した（所属等は 2014 年 4 月現在）。なお、測量調査期間は、平成 25 年 9 月 5 日から 26 年 3 月 31 日の計 13 日間であった。測量範囲は、墳丘部を中心に 4,591.861 ㎡を対象とし、計測点は墳丘部及び周辺地形を合わせると計 4,474 点であった。なお、今回の測量調査の成果として、25cm 間隔の等高線図を作製した（第 28 図）。

以下、調査の成果について述べていきたい。

3）墳丘測量の内容と成果（第 28 ～ 30 図）

後円部

現状は、第 28 図を見ると後円部東側から南側くびれ部にかけて、の墳端から墳丘斜面が高さ 4 mにかけて大きく削平されているのがわかる。墳端の傾斜変換線が比較的良好に遺存しているのは、北側のくびれ部から後円部北東までの範囲である。しかし、該当部分においても墳端ラインが部分的に削平されている。

また、後円部東側の墳丘斜面上には、墳丘主軸から北側の等高線 253.500 m～ 253.750 mの間に、長さ 4 m、幅 0.7 mのテラスが確認できる。このテラス面には墳頂部にかけて 30 ～ 40cm の葺石と考えられる石が多く見られることから、このテラスが 1 段目の段築である可能性が高い。しかし、このテラスから北側くびれ部にかけての墳丘斜面の遺存状況が良い箇所でテラスの痕跡が確認できないことから、今後発掘調査による確認が必要である。くびれ部墳頂部から後円部墳頂部にかけての墳丘斜面では、等高線の幅や屈曲する状況から、北側の方が隆起斜道が遺存していることが分かる。

墳頂部については、墳頂部のほぼ中央に、長さ 6.1 m、幅 4.6 m、深さ 0.75 mを測る盗掘壙がみられる。この盗掘壙は、後円部から前方部方向にかけて深くなっていることから、盗掘の際に墳丘主軸の南東側から前方部に向けての掘り進められたものと考えられる。

以上の状況から後円部径については、二つ根拠を基にして考えていきたい。まず一つ目は、比較的に墳端の傾斜変換線が遺存している、後円部北東側から北側くびれ部にかけての標高 252.250 ～ 252.500 mの等高線が接する墳端ライン。二つ目は、隆起斜道、くびれ部や前方部の墳頂部テラスを二等分する墳丘主軸。これら二つの根拠を基に墳丘主軸上に円の中心がきて、かつ墳端ラインが遺存している箇所を通る、径 27 m が後円径であると考えられる（第 30 図）。

くびれ部

墳丘南側のくびれ部については、標高 253.00m の等高線よりも下位が削平されているため、築造当初の墳端の傾斜変換線が確認できなかった。北側のくびれ部については、標高 252.000m の等高線から墳丘方向にかけて延びる溝状の窪みのため、後円部側の墳端ラインが明瞭に見られい。しかし、溝状の窪みが墳丘にぶつかるくびれ部付近で、前述した後円部径と接する標高 253.000m の等高線付近から 2 mほど前方部側に等高線が北西方向に広がっている箇所が確認できた。この箇所で後円径が接する地点から墳丘主軸まで

5.5 m測り、この 5.5 mを基に墳丘主軸で反転復元した 11 mがくびれ幅となろう。また、墳頂部の標高が 254.50 mであることから、北側くびれ部の墳端からの差である 1.7 mが、くびれ部の高さとなる。

段築や葺石については、現状で確認できなかった。

前方部

第 28 図をみると、前方部の中ほどが、墳頂部の上端、墳端ラインと等高線とともに、墳丘側に大きく括れていることが分かる。これは、「ひょうたん塚」と呼ばれる所以であろう。この括れている両側の箇所については、現状の墳端の傾斜変換線に沿って、それぞれテラスが存在する。前方部北側については、くびれ部から前方部端部にかけて長さ 11 m、最大幅 3 mを測るテラス。一方、前方部南側については、長さ 9.1 m、最大幅 0.8 mのテラスが見られ、後世の削平により北側のテラスよりも幅が狭くなっている。

また、前方部端側の墳頂部では、北東から南西方向に長さ 5.3 m、幅 2.4 m、深さ 0.5 mの土壙が掘り込まれており、さらに取り付き路として前方部西側の隅角方向に向けて削平されている。この土壙内には、近現代の弘法大師堂や記念碑が設置されており、さらにその周辺には古墳に伴うであろうと考えられる組み合わせ式の石棺材などの石が集められている。この石棺材については、後節で報告する。

また、前方部南側の隅角から後円部まで続く墳端の削平は、墳丘に沿って幅 1 m、深さ 0.5 mの溝が掘り込まれている。以上のように前方部端は、後世に大きく改変を受けているため、墳丘築造時の様相を明瞭に遺存しているという箇所は確認できなかった。しかし、前方部主軸上の端部側には、墳端の痕跡と考えられる、二つのテラスが見られる。一つ目の墳丘側のテラスは、前方部墳頂部上端からテラス下端までの距離 1.35 mの所で、長さ 7.5 m、0.7 m幅を測るものである。このテラスの北側では、くびれ側に長さ 2.9 m、幅 1.4 m程張り出し、一部墳頂部の土壙造成による墳丘盛土の流土により切断されているが、前方北側テラスと接続するものと考えられる。また、二つ目は、一つ目のテラスの上端から 1 m程外側に最大長 7.4 m、最大幅 1.5 mを測るテラスである。このテラスについても、北側が長さ 2.3 m、幅 1.5 m程くびれ側に張出している。

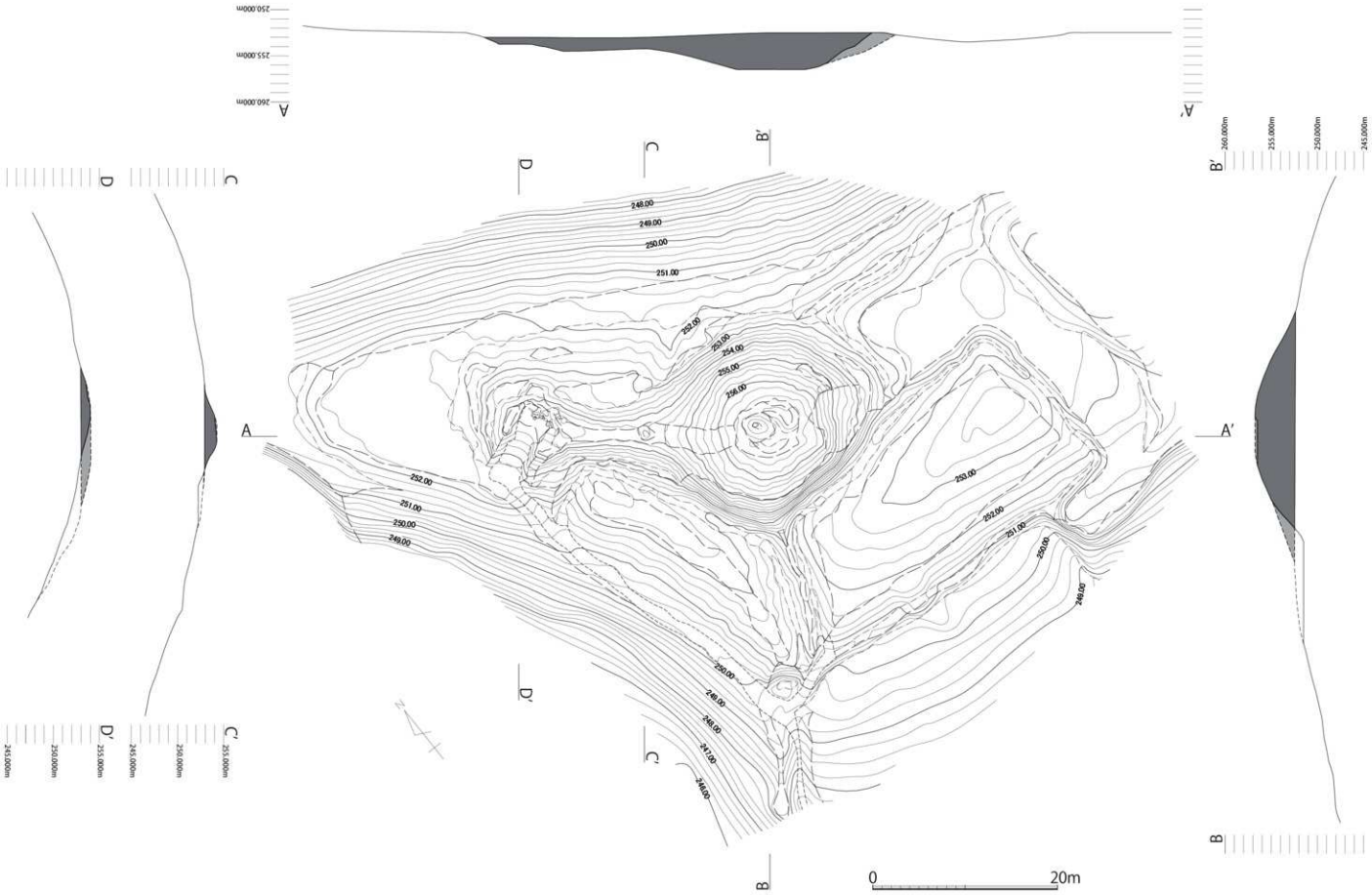
これら二つのくびれ部側に張り出しているテラスを基に、築造当時の前方部の形状を考えると、一つ目のテラスがくびれ部まで接合するという点で可能性が高いが、前方部の中ほどの括れが主軸側に入り込みすぎている点や、前方部の墳頂部の幅が異様に狭い点、後円部側の墳端の標高からくびれ部・前方部の墳端の標高の差が 0.75 mである点などを考慮すると、墳丘築造時から括れているのではなく、後世に受けた削平や風雨等の浸食により、括れている可能性が高いと考えられる。二つ目のテラスについては、くびれ部側への北側の張出しが短いものの、くびれ部側に向けて等高線とともに巡っている点。また、くびれ部で述べた北西方向への張り出しと、前方部端テラスの張出しが直線的につながる点から、このラインが前方部の墳端となる可能性が高い。このラインを墳丘主軸で復元すると、前方長 19.0 m、前方幅 16.2 m、前方高 1.8 mとなる。この復元でみると前方部南側隅角については、取り付き路により墳丘盛土が削平され、墳端は削平に伴う尾根斜面の崩壊により消失している可能性がある。

段築については、現状では確認できないが、先述した一つ目のテラスが段築になる可能性もあるため、今後発掘による確認が必要となろう。葺石についても確認できなかった。

周辺部

墳丘に伴う外部施設として、前方部で述べた北側の墳端ラインの外側には、等高線と下端の傾斜変換線が墳端とほぼ平行して巡っている。これは、豊後大野市地域の前方後円墳の特徴である、墳端の外側に巡るテラスの痕跡である可能性がある[9]。今後、さらに外側にあると考えられる周溝とともに、発掘調査による確認が必要である。

後円部東側から南側にかけて後円部が大きく掘削され、最大長 35.6 m、最大幅 15.7 mの方形の区画が造成されている。この方形区画内では、南側以外の周囲に溝を掘り込んだ整地がなされていることから、畑地造成によるものであるとは考えにくい。また、この区画内で中世の土師器片を表採していることから、何かしらの建造物があった可能性がある。この区画のさらに前方部側でも、最小長 22.9m、最大長 38.1 m、最大幅 5.8 mの台形を呈した区画が見られ、南西側以外の周囲三方向に溝が巡っている。ただ、こちら側の平坦面は狭いため、畑地や建物を造成するための区画であったとは考え難い。この区画でも中世の土師器片を表採している。また、これら両区画の間には土橋状の掘り残しがみられる。



第２８図　坊ノ原古墳墳丘測量図（S ＝ 1/400）

前方部端の外側には、最大長 14.5 m、最大幅 14.5 m、最小幅 7.6 mの大きな台形状のテラスがあり、テラス面の等高線も乱れていないことから、後世に整地されてる可能性がある。

これらの状況から墳丘周辺からは、前方北側隅角からくびれ部で確認されたテラス以外、明確な周溝や造出等の墳丘に伴う外部施設が現状で確認できなかったが、中世以降に何かしらの改変を受けている可能性が高い。

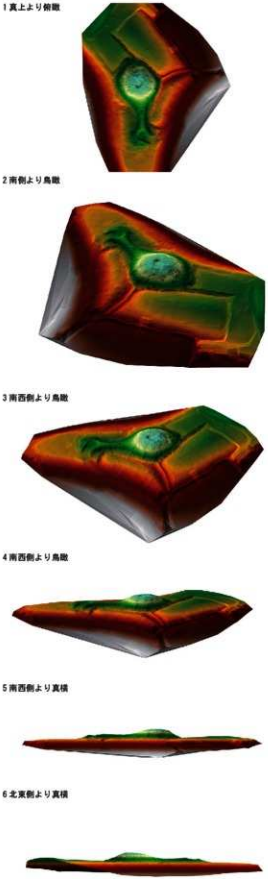
測量成果のまとめ

これまで述べてきた測量調査の結果を基に、墳丘の復元案として第 30 図を作製した。この図を基に各部位の詳細について考察してみたい。

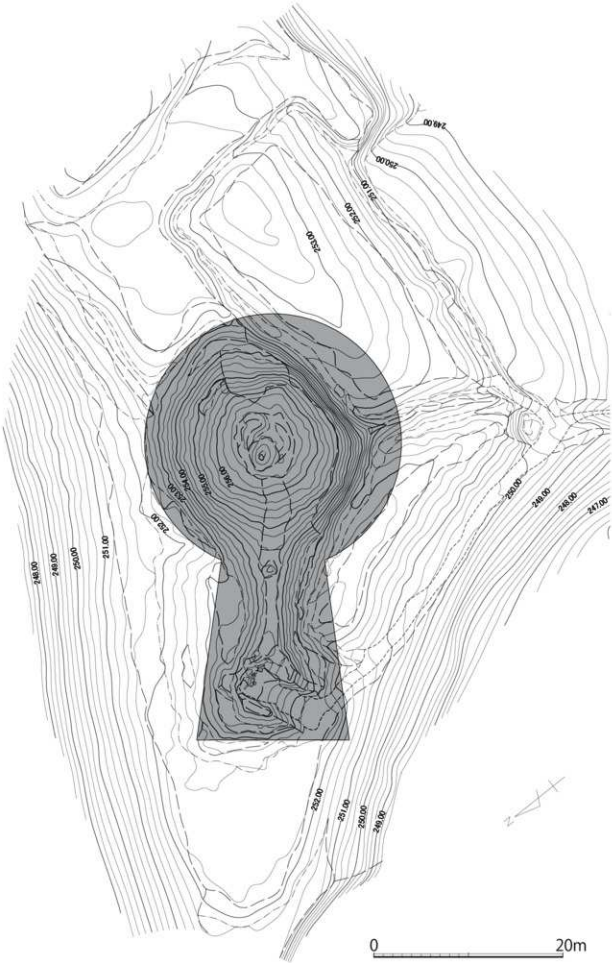
後円部については、北東側で尾根斜面から続く下端ラインが墳丘下端の傾斜変換線と接合する地点、さらに北側で墳端ラインが下端ラインと分岐する地点との間にある幅 5.3 mの等高線が乱れていない箇所を墳端として、墳丘主軸上に中心が来る径 27 mが後円径となる。後円高は、4.2 mである。くびれ部については、墳丘主軸からこの後円部径と接する標高 253.000m の等高線付近までの 5.5 mを基に反転復元した 11 mがくびれ幅で、くびれ部の高さは 1.7 mである。前方部については、墳丘主軸上の前方部端側にみられる墳丘側から二つ目テラス北側からくびれ部側に張り出している箇所とくびれ部を結ぶラインが前方部の墳端ラインとなる可能性が高い。このラインを基に墳丘主軸で復元すると、前方長 19.0 m、前方幅 16.2 m、前方高 1.8 mとなる。以上の復元想定より、45 mが墳長であることから、清水氏らが想定した墳丘規模と大差が無いことがわかった (表1)。

また、段築については、後円部東側の一部のテラスと、くびれ部から前方部の墳丘主軸側までにみられるテラスの高さが等高線の 253.50 mを前後としてほぼ同じ高さであることから段築の痕跡である可能性が高い。一方、このテラスに関連して、前方部中ほどの両側にみられる括れやテラスで、北側のものについてはテラス面が広く、平坦であることから後世に一部削平されたものと考えられる。

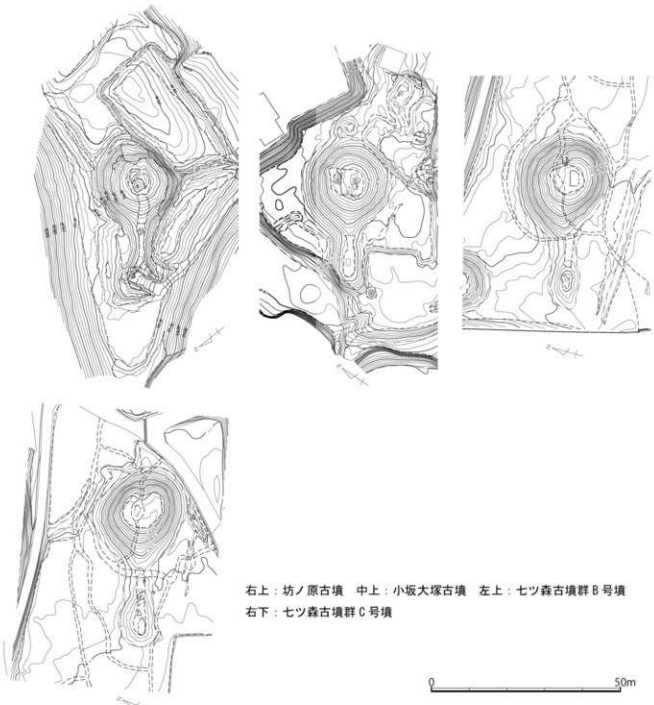
さらに、墳丘北側の墳端ラインの外側では、下端の傾斜変換線が墳端と平行して巡っているのが確認された。この傾斜変換線は、豊後大野市地域所在する前方後円墳の特徴でもある、墳端の



第 29 図　坊ノ原古墳測量計測データ3D図



第 30 図　坊ノ原古墳墳丘復元図（S=1/400）



第 31 図　墳丘測量比較図 (S=1/1000)

表 1　墳丘測量成果一覧

各部位等	坊ノ原古墳（清水案）	坊ノ原古墳（筆者案）	小坂大塚古墳	七ツ森古墳群 B 号墳	七ツ森古墳群 C 号墳
墳長	46.0m	45.0m	42.5m	48.0m	49.0m
後円径	26.0m	27.0m	27.4m	28.9m	29.6m
後円高	4.0m	4.2m	4.35m	5.5m	4.0m
くびれ幅	10.0m	11.0m	8.6m	8.8m	7.0m
くびれ高	—	1.7m	1.8m	1.25m	1.0m
前方長	19.0m	19.0m	15.5m	19.7m	20.0m
前方幅	—	16.2m	9.5m	8.5m	10.4m
前方高	2.0m	1.8m	1.8m	1.25m	1.0m
墳丘主軸に対する標高差	—	0.5m	1.0m	0.8m	0.5m
築造時期	—	3～4 期	3～4 期	4 期	3 期

外側に巡るテラスの痕跡である可能性がある。今後、墳丘規模及び周辺施設を確認するためにも、発掘調査を実施する必要がある。

古墳の内部主体としては、前方部墳頂部に見られる石材から組み合わせ式の石棺であることが想定でき、後円部墳頂部の盗掘壙から推定すると、長軸２m程度の石棺であったものと考えられる。

４）考察

坊ノ原古墳の墳丘形態については、第 30 図の復元案から、前方部が低くほぼ平坦で、くびれ幅から前方部端が大きく開かないことから、柄鏡形であるといえよう。これは、測量の計測データより作製した 3D 図[3]の第 29 図１・５・６からでもわかる。築造時期については、この墳丘形態や内部主体から集成編年３～４期であると想定され、以前市内で測量調査を実施した小坂大塚古墳と同時期の同墳丘形態であるため、以前報告した内容を踏まえ改めて比較したい（玉川 2012）。

坊ノ原古墳は、墳丘規模や墳丘の形態から小坂大塚古墳（豊後大野市）、七ツ森古墳群Ｂ・Ｃ号墳（竹田市）との類似性が指摘できる（第 31 図・表１）。小坂大塚山古墳や七ツ森古墳群Ｂ・Ｃ号墳では、墳丘主軸に対して、くびれ部から前方部にかけて左右の墳端に標高差がみられる。この標高差は、小坂大塚古墳や七ツ森古墳群Ｂ・Ｃ号墳では、古墳築造における視覚効果を考慮し、墳形そのものを実際より大きく見させるための築造技術である可能性が高いと考えられる。坊ノ原古墳についてみてみると、遺存している等高線よりそれぞれ比較すると、南側の方が 0.5 m程低いことが窺えることから、先の事例と同様の様相を示している可能性がある。しかし、墳丘の南側墳端の削平が著しいため、築造技術によるものか自然地形に起因するものかは、発掘による確認が必要となる。仮に、左右の墳端の高低差が築造技術によるものであるならば、坊ノ原古墳が立地している尾根の南側に前方後円墳であることを認識させたい対象が存在した可能性が高い[4]。これは、古墳が立地する尾根の南側に、古墳や横穴墓群や集中して見られることからも伺えられる。今後、墳丘の保存・整備を考慮に入れた発掘調査の成果から検討する必要がある。

（玉川）

(1) 基準点 K-1・2をそれぞれ後円部西側の平端面と前方部端側の平端面に設置。
K-1　X=-3434.293，Y = 44270.790，Z=251.631、K-2　X= -3475.295，Y= 44252.056，Z= 252.414

(2) 三重盆地の東側縁辺部に存在する前方後円墳である。発掘調査により、秋葉鬼塚古墳と同様に墳端の外側にテラスを形成し、周溝へと接続する形態であることが判明した。

(3) TIN データにより 3D 図を作製。TIN データとは、不規則三角形網（Triangulation Irregular Network の略）というデータで、地形表現に優れているという特徴がある。点群からそれぞれにもっとも近い三点とつなげ、三角形の集合体で立体物を表現するものである。

(4) 古墳築造における立地状況を決定する「占地」という概念が存在すると考えられる。この「占地」の概念とは、古墳築造に当たり立地条件を決定する概念で、良好な自然地形を選定する側面のみならず、当時の政治的な情勢をも包有する地域のランドマーク的な性格をもつものである。

【引用・参考文献】

賀川光夫　1956「七ツ森古墳－附七ツ森古墳人骨－」『大分懸文化財調査報告書（第四集）』大分県教育委員会

清水宗昭　1980「第５節　大野原台地の主要古墳」『大野原の遺跡　大分県大野地区緊急発掘調査報告書総集編』大野町教育委員会

賀川光夫ほか　1980「第五章古墳時代」『大分県大野町史』大野町史刊行会

佐藤識洋　1986「岡城路」『「歴史の道」調査報告書　岡城路』大分県文化財調査報告第七十二輯　大分県教育委員会

鵜賀俊一　1992「第５章大分県　坊ノ原古墳」『前方後円墳集成　九州編』株式会社山川出版

諸岡　郁　1990「三重町の前方後円墳」『おおいた考古』第３集　大分県考古学会

田中裕介　1995「東九州における古墳時代の首長系譜の変遷と画期（上）- 墳輪と墳丘形態からみた大分の首長墳の編年 -」『おおいた考古』第７集大分県考古学会

諸岡　郁　1998「秋葉鬼塚古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書　第 100 輯　大分県教育委員会

諸岡　郁　2002「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報VI』三重町教育委員会

下村智・吉田和彦・玉川剛司　2003「古墳におけるデジタル測量の研究 - 大分県下の古墳を事例として - デジタル測量」『九州考古学第』78 号九州考古学会

玉川剛司　2004「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2　別府大学文化財研究所

田中裕介　2004「豊後国」『日本古代道路辞典』八木書店

玉川剛司　2012「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報３- 平成 22 年度調査 - 』豊後大野市教育委員会

玉川剛司　2014「漆生古墳群測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概報４- 平成 23-24 年度調査 - 』豊後大野市教育委員会

2 坊ノ原古墳の石棺材

井大樹

1) はじめに

坊の原古墳とは、豊後大野市大野町大字桑原字羽部に所在する前方後円墳である。清水宗昭氏によれば地元の郷土史家橋爪文夫氏が発見し、清水氏らが平板測量を行い『大野原の遺跡』(清水 1980)にて報告を行ったものである。この報告には周辺に位置する円墳である御塚古墳の測量成果も記されており、この 2 基が大野町における主要な古墳である。御塚古墳については大正 14 年 (1925) に刊行された『大分縣大野郡々史 十月號 郡政廃止記念號』(日豊時報社) にて鬼塚として詳細に報告されており、早くから知られていたことが伺える。

現状、後円部の一部が耕作により削平され、前方部は弘法大師堂が設けられたことにより掘削を受けている。この前方部に今回報告をする石棺材が 2 枚あり、その来歴を含め記述したい。

2) 古墳・石棺の来歴

先ほど述べたように坊の原古墳の学術的記載は 1980 年の清水・賀川の報告を待たねばならなかった。しかし、地元では古墳としての認識があったかは不明だが、神聖な場としていたことは考えられる (賀川 1980)。前方部に弘法大師堂が設けられたものこのためである。この弘法大師堂に関しては、付近の石碑にその由来が書かれており、地元の衞藤市松翁が地区に古墳を含む山林を寄付したことにより、記念事業として堂を設置した旨が書かれている。地元の住民からの聞き取り調査によれば、この衞藤氏宅の井戸蓋として石棺材が使われていたようであり、賀川氏の報告にある「近くの古井戸の蓋に利用」とはこのことを指していると考えられる。現在、この石棺材は大師堂の横に置かれているが、これは井戸を使わなくなった際地元住民によって戻された為である。

3) 石棺材について

大師堂を作る際に様々な石材を持ち込んでいるが、古墳に伴う棺材と考えられるものは 2 点である。何れも硬質の凝灰岩製で、その形状化から組合せ箱式石棺に復元できると考えられる。

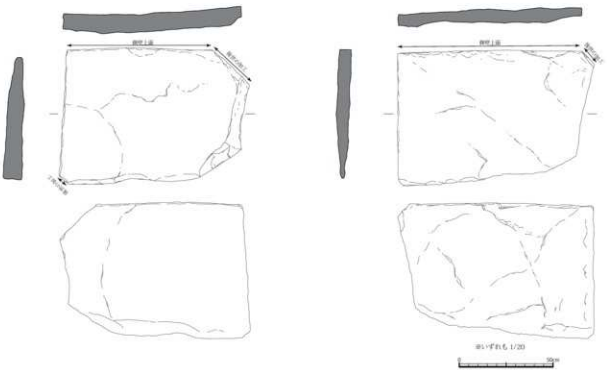
1 はは組合せ箱式石棺材の蓋もしくは側板と考えられる棺材である。横幅は 95 ㎝、縦幅は 73 ㎝で、厚さは 10 ㎝程度だが上面にかけ細くなり 5 ㎝程度になる。石棺材の側面には幾つかの加工痕が残されており、見た目の違いから 2 種類に分けられる。1つは上面に施された鈍い整形面で、断面形態はやや丸くなる。県内の他の箱式石棺にもこの様な整形痕がみられることから、石棺を造る際の加工痕と推察される。もう一つは刃物で切断したようなシャープな加工面でおそらく古墳時代のものではないと思われる。先述したように井戸蓋等に使用されていた為、後世の加工と判断したい。棺材の表面に赤色顔料等は確認できず、その形態からも内外面の判断は付かない。

もう一つの棺材である 2 も蓋もしくは側板と考えられる。横幅は 110 ㎝、縦幅は 70 ㎝で厚さは 5 ～ 7 ㎝程度である。1 と同様上面には鈍い整形面が残り上下の判断は可能である。上面の端にはシャープな加工面もみられる為、後世に加工されたことがわかる。こちらも表面には赤色顔料を確認出来ず、その形態からも内外面の判断はつかない。

以上のように残された石棺材を観察したが、組合せの箱式石棺であり、蓋もしくは側板である事がわかった。豊後大野市内の潰平石棺群 1 号・2 号・3 号石棺では蓋の内面に棺身と密着させることを意識した刳りこみ溝があり、このような特徴は神崎築山古墳、亀塚古墳、上ノ坊古墳等でもみることができる。このような組合せ箱式石棺も側板の上面に鈍い整形面が確認でき、石棺材は阿蘇溶結凝灰岩や結晶緑泥片岩の一枚石で造られている。上記の点やその大きさ等から、蓋の可能性よりも側板として考えた方が自然なのではないかと考えられる。また、豊後大野市内の前方後円墳では主体部の調査が行われたものはなく、今回の坊ノ原古墳の箱式石棺の例は、この地域の様相を考える上で重要である。周辺の箱式

石棺の調査や今後の発掘調査を通じてこの点について明らかにしていきたい。

【参考・引用文献】
賀川光夫　1980「坊ノ原古墳と御塚古墳」(『大分県大野町史』175－179)
清水宗昭　1980「大野原台地の主要古墳」(『大野原の遺跡』208)　大野町教育委員会



第32図　坊ノ原古墳の石棺材

前方部の弘法大師堂

衛藤市松翁碑

坊ノ原古墳墳丘近景

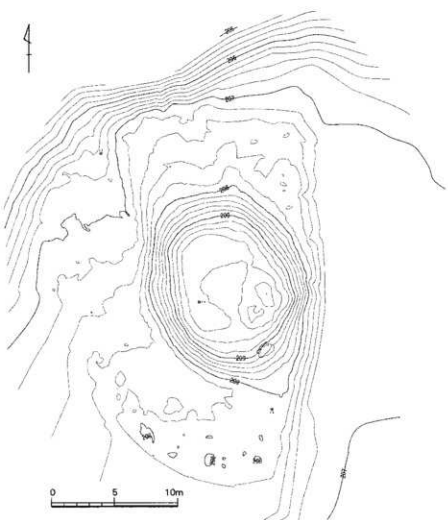
石棺材

V　中ノ原古墳

清川町三玉の佐草・宇田枝地域の沖積平野を見下ろす標高約208mの台地上に所在する。周囲には古墳・横穴は知られておらず、奥嶽川流域では唯一の古墳である。現在は中ノ原古墳という名称となっているが、過去には佐草古墳とも呼ばれている。昭和63年に旧清川村指定史跡となり、町村合併後も市指定史跡として至る。

立地環境は山林内で植林による造成のためか墳丘周囲の地形の改変がみられる。墳丘は楕円気味の形態で、東西径14m、南北径16mで、高さは約2mを測る。墳頂は径7mほどの平坦面があり、中央付近には径4m程の窪みがあることから盗掘跡と思われる。葺石はみられず、段築なども確認できない。北側墳端に前方部状に張り出す地形が確認できるが、現況では改変跡と思われ、墳丘の一部ではないとみられる。出土遺物や主体部などは特に伝えられていない。(諸岡)

第33図　中ノ原古墳周辺地形図



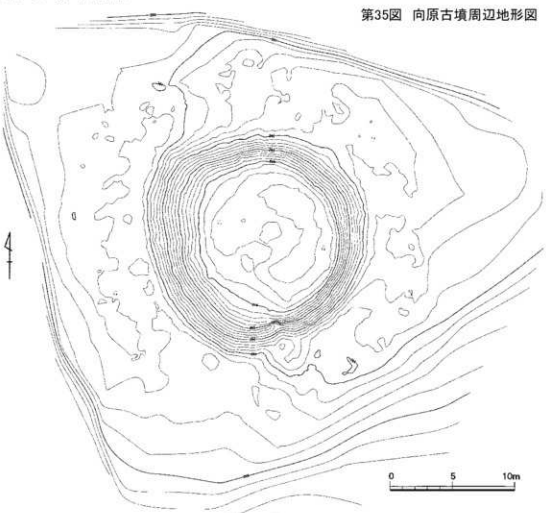
第34図　中ノ原古墳墳丘測量図

Ⅵ　向原古墳

大野町北園の向原川流域の沖積平野を見下ろす標高261mの丘陵上に所在する円墳である。前方後円墳の坊ノ原古墳より約1.3㎞南西の位置で、同じ立地環境での築造と思われる。存在は古くから知られており、日名子太郎「大野郡古墳横穴調査書」(『大分懸史跡名勝天然記念物調査報告第七輯』昭和4年)には円塚として記載されている。

現況は概ね正円形に近く、径は18m、高さは墳丘東側で約2.8m、西側で3.4mを測る。墳頂は径10mほどの平坦面があり、中央付近は4m×3m程の楕円形状にわずかに窪んでいることから、盗掘痕と思われる。葺石はみられず、段築なども確認できない。墳丘の南側に張り出す地形があるが、倒木による墳丘崩落跡である。現況では観察できないが、墳丘周囲の等高線から周溝の存在の可能性がある。出土遺物や主体部などは特に伝えられていない。(諸岡)

第35図　向原古墳周辺地形図



第36図　向原古墳墳丘測量図

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	ブンゴオオノシナイイセキハックツチョウサガイヨウホウコクショ
書 名	豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書６
副 書 名	平成26年度調査
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	田中裕介　玉川剛司　井大樹　安部和城　江口寛基　中嶋小春　諸岡　郁
編 集 機 関	豊後大野市教育委員会
所 在 地	〒879-7131　大分県豊後大野市三重町市場1200番地
発 行 年 月 日	平成28年3月28日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
漆生古墳群（ウルシブ）	豊後大野市（ブンゴオオノシ） 緒方町（オガタマチ） 越生字大久保・城山（コシブ・オオクボ・ジョウヤマ）	44212	212203	32°58′36″	131°29′26″	2014.8.7 ～2014.12.27	26.5㎡	確認調査
秋葉鬼塚古墳（アキバオニヅカコフン）	豊後大野市（ブンゴオオノシ） 三重町（ミエマチ） 秋葉字鬼塚ほか（アキバ・オニヅカ）	44212	212081	32°58′08″	131°34′46″	2014. 10.22 ～2014.12.19	51㎡	確認調査
坊ノ原古墳（ボウノハル）	豊後大野市（ブンゴオオノシ） 大野町（オオノマチ） 桑原字羽部（クワバラ・ハブ）	44212	212412	33°01′48″	131°28′27″	2014.9.3 ～2015.3.28		測量調査
中ノ原古墳（ナカノハル）	豊後大野市（ブンゴオオノシ） 清川町（キヨカワマチ） 三玉字辻（ミタマ・ツジ）	44212	212131	32°57′26″	131°30′40″	2015.3.9 ～2015.3.25		測量調査
向原古墳（ムコウバル）	豊後大野市（ブンゴオオノシ） 大野町（オオノマチ） 北園字竹ノ内（キタゾノ・タケノウチ）	44212	212405	33°01′23″	131°27′44″	2015.3.9 ～2015.3.25		測量調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
漆生古墳群	墳墓	古墳	葺石・墓坑跡		前方後円墳ほか
秋葉鬼塚古墳	墳墓	古墳	葺石・周溝	壺形埴輪	前方後円墳
坊ノ原古墳	墳墓	古墳			前方後円墳
中ノ原古墳	墳墓	古墳			円墳
向原古墳	墳墓	古墳			円墳

豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6

平成26年度調査

発　行　日　2016年3月28日発行
編集・発行　豊後大野市教育委員会
〒879-7131豊後大野市三重町市場1200